寒川町史編集委員会次第

日時：令和８年（2026）5月19日（火）
10時00分～
会場：寒川総合図書館会議室

1　議事録承認委員の選出

2　議題

（1）町史編さん事業の振り返りと今後の展望について

3　その他

①座談会について

１テーマ

町史編さん事業の振り返りと今後の展望について

２ 趣旨

令和 8（2026）年 11 月で寒川文書館は開館 20 周年を迎えます。また、同年は町史編さん事業の開始から 40 周年という節目の年でもあります。これを機に、これまでの町史編さん事業を振り返り、これからの展望について、元委員や現委員の皆様から承りたいと考えております。

３ 日時

令和 8（2026）年 5 月 19 日（火）10 時から 11 時 30 分まで

４ 場所

寒川総合図書館会議室（３階）　神奈川県高座郡寒川町宮山 135-1

５ 出席者

元委員　圭室文雄先生　鈴木保彦先生　※誌上参加　大口勇次郎先生　鳥養直樹先生
現委員　内海孝先生　松岡俊先生
事務局　鳥海忠相館長、平尾直樹、高木秀彰

６ 当日の内容

座談会当日は、下記の内容①・②につき、お話をいただければと考えております。同封いたしました資料を参考にしていただければ幸いです。

（内容①）町史編さん事業を振り返る

●編さん事業の準備期（1985 年度）

事業に対する藤沢賢一町長の想い、児玉幸多先生に引き受けていただいたこと、事務研究会の過程などについてお話しいただきたく存じます。【圭室先生】

●本編の刊行期（1986 年度～2002 年度）と本編刊行後（2023 年度以降）に分けて、力を注いだこと、編集して得られた成果、いま振りかえって思うことなどをご担当された分野のことを中心にお話しいただきたく存じます。

・考古【鈴木先生】
・宗教【圭室先生】
・近現代【内海先生】
・古代中世【鳥養先生※後日加筆】

・近世【大口先生※後日加筆】
・民俗と美術工芸【圭室先生※可能ならばお願いしたく存じます】

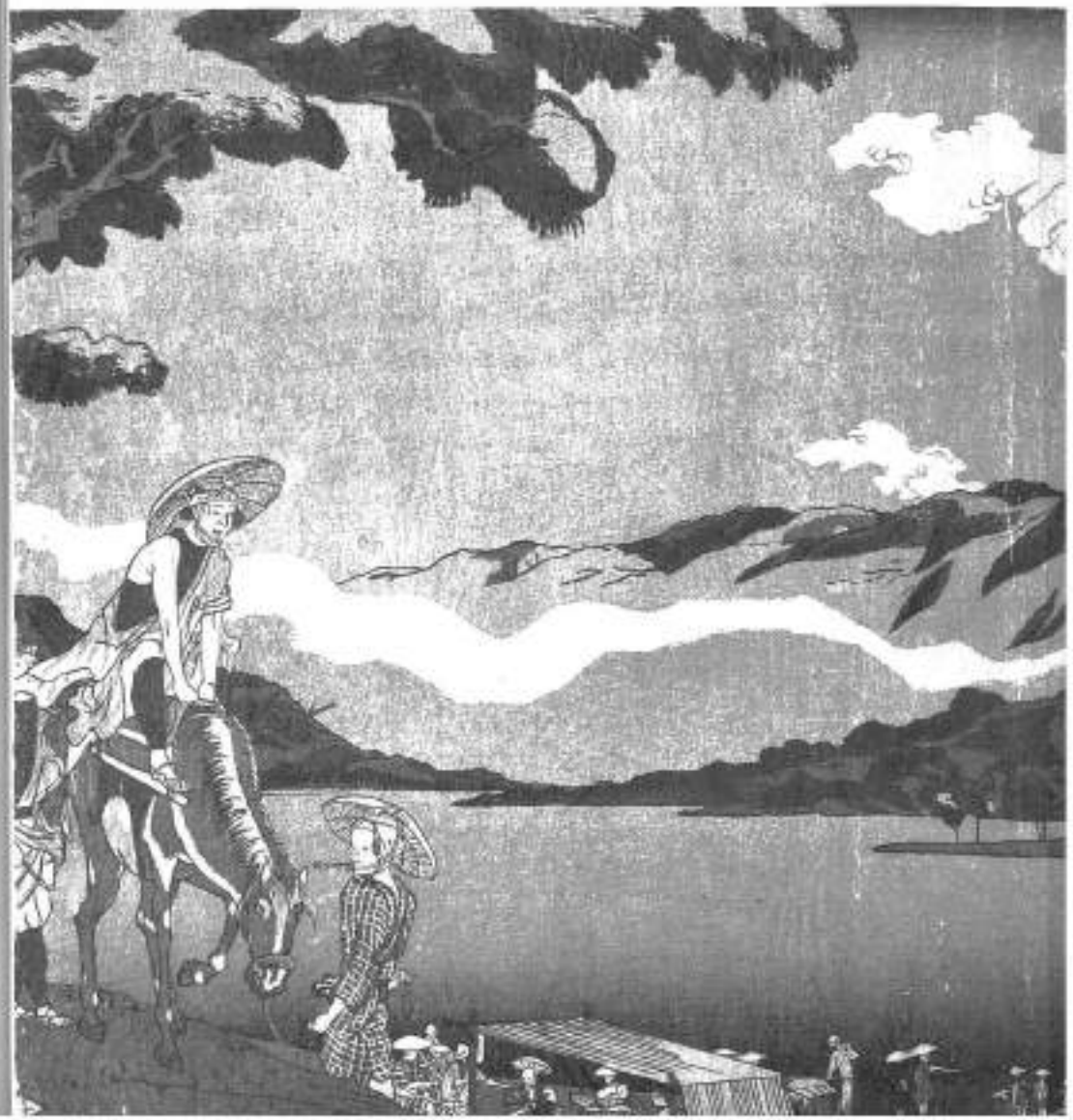
（内容②）編さん事業の意義と今後への展望

ISSN 0914-8043

寒川町史研究

1988

創刊号



〈座談会〉

寒川町史編さんと資料保存

一、寒川町史編さん事業の実施までの経過
二、寒川町史編さんの意義
三、寒川町史編さん事業の資料調査の経過
四、資料の保存と活用の方策

座談会出席者
総括編集委員　児玉幸多
主任編集委員兼宗教・近世担当編集委員　（司会）圭室文雄
考古担当編集委員　木村勇
古代・中世担当編集委員　島養直樹
近世担当編集委員　大口勇次郎
近・現代担当編集委員　井羽邦男
近・現代担当編集委員　内海孝
文化遺産担当編集委員　佐藤昭夫
民俗担当編集委員　宮本袈裟雄
町総務部長　山田文夫

一、寒川町史編さん事業の実施までの経過

司会　本日は、お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。

早速ですが町史編さんをめぐっての座談会を始めたいと思います。

今日の座談会では、大体四つのテーマについてお話をしていただくようにしたいと思います。

その第一は、寒川町史編さん事業の経過ですが、これは事務局の方でお願いします。山田さん、どうぞ。

山田　それでは、寒川町史編さん事業の経過をお話したいと思います。昭和六〇年度施政方針で、初めて町史編さん事業に取り組むことが打ち出されました。

郷土寒川の歴史資料が少しずつ散逸していく現状を反省し、現在の寒川を育ててきた過去を正しく後世に伝えていくことが、私たちの大切なつとめであると藤沢賢一町長が出した方針であります。昭和六〇年四月一日に企画室にその準備のための職員を配置し、同年八月、町史編さん事務研究会を発足

させました。

事務研究会では、基本的な事項について研究、協議を重ねてまいりました。更には、昭和六一年一月に寒川町史編さん審議会委員を委嘱させていただきました。この審議会では、町史編さんの基本構想の審議を重ね、基本構想の策定が図られました。

それに基づき、昭和六一年四月、町史編さん室が新たに設置され、室長以下四名の職員が配属され、また、編集委員会も発足して、本格的な編さん体制が整いまして、今に至っております。なお、本年度より部制が敷かれ、町史編さん室は、総務部に所属することになりました。

司会　新しく町史を作ることにより、住民の郷土意識をはぐくむこともできるのでしょうね。

それでは、寒川町史編さん基本構想について、説明をしていただけませんか。

山田　基本構想については、本誌に別途掲載いたしますので、その概要をかいつまんでお話しますと、昭和六〇年度から準備に入っておりまして、昭和七四年度までの一五年間で全一五巻、古代から昭和六〇年までを編さんします。特に町民参加に支えられ、広く町民の方々に親しまれる町史づくりをしようと考えていますし、また、今回調査した資料が五〇年、一〇〇年後になっても利用できるようなことを考え仕事を進めておりますので、資料などお持ちの方は、ぜひ御協力をいただきたいと思います。

司会　どうもありがとうございました。町史を作るということは大変なご苦労があり、費用もかかると思いますが、よろしくお願いします。

二、寒川町史編さんの意義

司会　それでは、寒川町史編さんの意義について児玉先生からお話をしていただきたいと思います。

児玉　改まって言うこともありませんが、だれでも自分の住んでいるところ、あるいは、その他についての歴史的な興味を持っているわけで、その歴史というのが、広く言えば人類社会の発展をみて、今日の社会がどうして構成されたかということを考える材料になる。また、それによって将来を予測することもあり得るわけです。

日本の場合で言いますと、小学校で郷土史的なことをやり、中学、高校でも、今は必修ではありませんが、何らかの形で日本史なり世界史なりの勉強をしています。

しかし、そういう広い歴史だけでは自分の住んでいる地域の歴史、あるいは祖先がどんな生活をしていたかということは分からないので、もう少し小さく区画された場所場所の歴



児玉

史を知ろうという欲求がある。それに応じて地域の歴史が編さんされているわけです。その一つが都道府県史です。

しかし、現実には県史でも自分の住んでいる町や村の様子は分からない。神奈川県にも神奈川県史がありますけれども、寒川町について触れていることは極めて少ない。そうすると、もっと身近なものを知りたい。われわれの祖先のこともありますし、たとえば神社仏閣、あるいはいろいろな建造物、文化遺産的なもの、あるいは民俗的な風土、習慣といったものを身近なものとして感じるためには、市、あるいは町を単位に、もっと細かく言うと、大字とか小字というような集落の歴史も知りたい。私が一昨年、沖縄へ行ったときは、こちらでいう大字に当たる地域の歴史の編さんの話を聞いたのです。

そういうことの一端として、この町史編さんも始まったと思うわけです。したがって、できるだけ町民の方の身近のもの、また、関心の深いものについてできるだけ詳しく調査して記述することが大事なことになるだろうと思います。

三、寒川町史編さん事業の資料調査の経過



金子

司会　それでは編さん事業の資料調査を踏まえて、各部門ごとに、この一年の経過をお話をしていただけませんか。合わせて部門ごとの編さんの意義、ねらいのようなものもお話いただければと思います。まずは考古担当の木村先生、お願いします。

木村　寒川町には、明治四一年（一九〇八）に東京帝国大学教授の坪井正五郎先生によって行われた応神塚古墳の発掘というような、日本考古学史に残るような大変古い時代の発掘調査例があり、当時は大変話題になったことがその頃の新聞などに書かれておりますが、近頃ではそのような古い時代の文化財について、一般町民の皆さんから注目されるような事はなかったと思います。しかし、町史の編さん事業が開始されて約一年が経過しましたが、最近は町民の皆さんの意識も徐々に変化してきたと思います。寒川町に生まれ、育った私が言うのも何ですが、もともと寒川町は、相模国の一之宮である寒川神社があるという土地がらですから、地域の住民

も古い伝統と歴史のある町に住んでいるという誇りをもっていると思います。ですから児玉先生がおっしゃるような、歴史を身近なものと感じ、文化財などにも関心をもつという土壌はあると思います。話は少しそれますが、菅谷神社で神輿が古くなったから作り変えるということになり、住民に寄付を募ったところ、集まった浄財が予定をはるかにオーバーしたということがありました。



木村

これなどは、地域に対する町民の意識をよく反映していると思います。ですから、町史編さんというような事業が開始され、実際に各地で調査が始まるにつれ、町民の方々が、関心を持つようになるのは当然のなりゆきという感じがいたします。

私共は考古資料の調査を担当し、昨年度は個人の所蔵品や寒川小学校に所蔵されているもの、あるいは先にお話しした明治四一年に坪井正五郎先生が発掘した姫神塚古墳の出土品等について調査しましたが、寒川小学校には、縄文時代から古墳時代までの土器が予想以上にあり、完形品のほかに石膏を使って復元できたものもいくつかありました。これらはすべて実測図を作成いたしましたが、小学校に復元してお返ししましたところ、学校側では今後、社会科の教材として使いたいので、これらの考古資料の解説したものを作ってほしいと要望されました。私共といたしましても、このような資料が死蔵されるのではなく、教材として活用されればこんなに嬉しいことはありませんので、先生方が郷土資料として使えるような実測図入りのパンフレット「縄文時代と縄文式土器」、「弥生時代と弥生式土器」、「古墳時代と土師器・須恵器」を作成いたしました。無論このようなことは、町史の調査本来の仕事とはいえませんが、町史編さん事業をとおしてこのような啓蒙活動をすることも意義のあることと考えております。

昨年度調査した考古資料では、縄文時代前期の土器が最も古いもので、縄文時代以前の旧石器時代の遺物が発見されたということはないようですが、旧石器時代の遺物は、ローム層中の地表からはかなり深いところにあるのが普通ですから、偶然に発見される機会は少ないわけです。ですから、これまで発見されなかったからといって、無いとは言い切れません。今後の課題と考えています。

児玉　縄文前期の土器というのは、どこの遺跡から出たものですか。

木村　岡田の新堀排水路の工事で出土したもので、「諸磯b式」という型式の約五、〇〇〇年前の縄文前期後葉の土器です。また、これ以外にも考古部門では町史編さん事業と並行して、発掘調査を行っております。これは教育委員会に事務局

を置いていますが、町史に掲載しうる資料を得ることができるので、期待しております。昨年度から大蔵のほうの発掘調査が始まっています。

これは弥生時代末期の住居址のつもりで発掘調査を始めたのですが、調査したところ、方形周溝墓であった。たまたまその場に竪穴住居址のスミが二軒ばかり出ましたので、今年度になって、その続きの発掘調査を始めました。現在一〇一二坪くらいの広さですが、そのなかから住居址が八軒、その住居址群のなかに方形周溝墓がからんで出てきました。

方形周溝墓が住居址よりも後であったということがはっきり分かりましたので、そこは弥生時代の後期から末期にかけての一つの遺跡であったということが分かってきました。その隣の約二〇〇坪ばかりの土地をこの四月から全面的に発掘調査する予定ですが、それをやっていくと、その辺一帯の弥生時代の集落とか墓域が分かってくるのではないかという感じがします。

同時に、現在、県営住宅の関連で発掘調査が行われていますが、縄文時代中期の勝坂式期の竪穴住居址が約六〇軒程検出され、この時期の大規模な集落址であることが明らかになりました。この調査は、県で実施しているものですが、町史の編さんとうまくタイミングがあったものですから、この成果も町史に反映させたいと考えております。

今のが五次調査で、第六次をその東側でやるのですが、そこで一応、県としてはおしまいだという話です。

児玉　県営住宅はどの辺にあるのですか、またその総体面積は、どのくらいでしょうか。

木村　県営住宅は、岡田七丁目に建っているもので、現在本造平屋建てのものを鉄筋の住宅に立て替える工事をしております。

発掘調査はこれにともなうもので、全体の面積は、約六、五ヘクタール程になります。その東側、畑がいっぱいありますので、県の調査が終わった後に町でその続きをやると、その流れが分かるということで、教育委員会所属の文化財保護委員会としては、県が終わり次第、そちらのほうに手をつける予定です。これにより、とりあえず縄文と弥生の流れがわかってくるんだなという感じであります。

また、昨年度十三塚のなかのいちばん大きい塚、俗にわれわれは「オコリ塚」と言っていますが、それも発掘いたしました。けれどもそこから遺物は何も出ませんでした。完全に土盛りをした跡がはっきりと出ただけで、昔の古墳ではなかった。私は地層的なことは分からなかったのですが、先生方のお話ですと、室町末期の土だということですので、その頃の十三塚の関連の資料であることは確かだなということがわかりました。後は私共としては、十三塚の保存に努めたい。で

すから、実測をして、きちっと保存して、それを一つの資料としてあげていきたいということです。

児玉　十三塚というのは大阪でしたか、国の史跡に指定されたのがありますね。民間信仰に関係しているようですが、どういう性質のものでしょうか。

木村　十三塚は、十三の小形の塚が並んでいたり、地方に十三塚という地名が残っているところから、つけられた名称で、最近神奈川大学日本常民文化研究所で行われた調査では、壊滅したものも含めると全国で三三二カ所を数えますが、その由来や築造の意図については、信頼に足る文献等は残されていません。考古学的に発掘調査を実施した例はいくつもありますが、遺物が全く出土しないか、出土してもごくわずかに中世の遺物が出土する程度で遺構としての性格を把握できるような決定的なものが出土した例はありません。したがって、よくわからないものということができますが、全国的に集計されたデータからは、その多くが境界に存することが指摘されております。つまり、国とか郡村の境に位置する例です。次に多いのが有力な街道筋に沿っている例です。寒川町の例はこれに相当するものと思われます。その他では村の出入り口に位置するものなどがあります。

十三塚の性格については、この立地条件と中央の塚が大きく一直線に並ぶ例が多いのですが、十三という塚の数が仏教になるわけです。古くは、貝原益軒が『筑前国風土記』の中で十三塚を取りあげ、十三仏信仰とむすびつけ、父母の死んだ後、忌日ごとに十三年ないしは三十三年のとむらい上げまでの間に十三基の塚が逐次作られたという説を紹介しています。この「十三仏説」は現在でもみられ、先の神奈川大学の調査報告でもこれを支持し、さらにこの説を発展させたものもあります。また、柳田国男先生は明治四三年（一九一〇）に全国的に十三塚を集成され論考されたほか、戦後の昭和二二年（一九四七）に共著で『十三塚考』を発表されておりますが、これは、安宅・安鎮を目的として祭天と十二天の座を設け、修験者たちによって実修された野袋において塚として築いたものと推論しております。結局このあたりが、代表的な考え方ということになろうかと思います。

今後は大蔵の弥生時代の遺跡の発掘をきちっとやって、それを第一回の区切りとして、次に移っていきたいというのが現状です。

これまで現在分かった範囲内での遺物の復元と実測と写真を撮っていますが、ほとんどが弥生時代の土器で、その前や後の時代については土器片だけで、まとまったものは出ておりません。しかし、それを一つずつやっていくことによって、そこの家から次の家へというふうに話が伝わってきていて、あちらこちらでいろいろな情報が入り始めていますから、そ

うということを手がかりにして、次に進めていきたいと思います。

司会　町民センターのロビーに展示してあるものは何ですか。

木村　弥生時代末期のものです。去年発掘調査した方形周溝墓の溝の中から出てきた土器です。現在はその周辺をずっと追っています。

司会　それでは、文化遺産について、佐藤先生、お願いいたします。

佐藤　文化遺産という名称で、調査が進められていますが、われわれの方は寒川の先人の遺した文化遺産のうち美術工芸という部門を担当することになりました。最初からの方針で申しあげますと、それほど広い町内でもございませんし、完全な悉皆調査をすることを建前にしました。


佐　藤

と申しますのは、私共のグループが昭和三〇年代に関東の仏像を洗いざらい探してみようかということで探してみたんですが、残念ながら、東京に住んでいて各県の教育委員会なんかに聞きながら調査して歩くことになった。一応「関東彫刻の研究」という本までこしらえたんですけれども、最近の一〇年ぐらいの間に各県にそれぞれ博物館が出来上がり、そこに担当の彫刻の学芸員がいて調査する。そうなってみるとわれわれのやった調査というものはすいぶん漏れていたという感じがいたします。やはり地元の強みで充分な調べができるわけです。

つい数年の間に、埼玉なんかで、これはほとんど完全なと言ってもいいくらいの悉皆調査をやってみた。そうしたら、それまで埼玉県立博物館とか埼玉の文化財保護課なんかで調査していた以上に古い、いい物が見付かってくる。悉皆調査というものは実に大切なものだということを痛感したものですから、すべてのお寺を回って全部を調べて書き出して、そのうえで考えていこうという形をとろうということで、現在、進めております。一カ月に一座くらいの割合で、神奈川県立博物館のスタッフなどの協力を得て行っております。去年の六月頃から始めて、十三カ社寺、調査してまいりました。この後は残りのお寺と、また神社関係がすんでおりませんので、そういったものをしらみつぶしに調べていく。それによって寒川の文化財をできるだけ浮き彫りにしていきたいと思います。

児玉　寒川の文化財で、古いものはどの時代のものでしょうか。

佐藤　残念ながら、ごく古い作品はあまり出てこなくて、

測るとしても室町ぐらいまでの間のものが数点出てきている程度です。やきものなんかで鎌倉に源るのではないかというものが出土しているようですが、全体には古いものはあまり出てきていません。彫刻では、江戸時代のものがほとんどですし、絵画では念宗寺の阿弥陀来迎図が室町末である他は皆江戸時代以降です。工芸関係でも古いものはないのですが、遺品はすべて江戸の職人の手になったもので、このあたりが江戸の文化圏にとりかこまれていたことを示しています。当時小田原にも職人がいたと思うのですが、その作品がないのはおもしろい現象です。ただし、これは寒川だけのことではありません。けれど今後の調査に期待していきたいと思います。

石造遺物では寒川は中世のものが比較的豊富です。今回の調査で、倉見の行安寺に、割れて下半分だけになってしまった板碑を発見しましたが、これには南北朝時代の貞和三年（一三四七）の年紀がありました。これは寒川町内で最古の銘と思われるのでたいへん貴重だといえます。

書跡の関係では、美術的な面ではないけれど個人の方で日蓮宗でいう「おまんだら」つまり「南無妙法蓮華経」という題目を記した掛軸を、池上本門寺とか鎌倉の妙本寺など非常に多くのお寺からいただいてきたものが保存されており、その信仰のひたむきさが知られて、たいへん興味深いものと思われます。

司会　どうもありがとうございました。それでは、古代・中世を島養さんよりお話をしていただけませんか。

島養　寒川というところはなんと言いましても寒川神社の存在が非常に大きいと思います。寒川神社は相模国の一之宮ということで、ある意味では相模の国の神祇信仰の中心的な存在であった。同時に近くに海老名がありますけれども、そこには国府があったり国分寺があったということで、寒川町の古代史を考えるときに、もうちょっと北のほうの海老名も含めてセットとしてみる必要があるという考えを持っています。


島　養

そういう意味で寒川というのは海老名と並んで、特に平安前期頃まで、古代の重要な地域だと思っています。ところが史料がほとんどないんです。六国史のなかに若干、寒川神社のことが出てきますが、私は、「大和市史」の古代を担当したんです。あそこは皆目史料のないところで、いろいろご批判を受けるかもしれないけれど、かなり大胆な仮説を立てなければ、とても書けないところでした。

あそこにも式内社が一つありますけれども、それ以上にこちらの式内社は格も高いわけですから、それについてのいきさつを通史編でもいろいろ書きたいと思っています。

中世については、この地域のすぐ近くに大庭御厨、それから、懐島があった。交通の要衝として様々な事件を述べた資料が出てくるわけです。特に中世については、梶原景時関係の資料をどういうふうに織り込むかまだはっきり見通しがついていませんけれども、入れる必要があるだろうと思います。

古代の文書はほとんどないのですが、中世文書は鎌倉の報国寺関係の古文書のなかに知行関係の資料があり、後北条氏の文書や吾妻鏡などから、アプローチできる。資料集を作る場合でも、あるいは通史編を書く場合でも、梶原景時と並んでメインになるのは、寒川神社の棟札だと思います。後北条氏が伊勢氏から北条氏を名乗る根拠になっている大永二年（一五二二）の棟札は、学会でも話題になってまいりました。いずれこれは資料集、通史編のなかでメインの史料として扱っていきたいと思います。

昨年度の仕事は、基本的にはすでに出されている「神奈川県史」「鎌倉市史」「茅ヶ崎市史」等々のなかから史料を全般的に見回して使えそうな史料の見通しを立てていくということで、作業をしてまいりました。

司会　古代・中世では寒川に直接関係のある資料が少なくてお骨折りが多いと思いますが、何か目玉になるようなものはないでしょうか。

島養　何せ資料が散逸に少ないという状態なので、どのへんを目玉にしていくかも、手探りしながらやっています。そのなかから出てきたのが、寒川神社のことはともかく梶原氏関係と棟札というところで、常識的な結論に達しつつあるわけです。また、棟札や後北条氏関係の史料については本格的に取り組んでみたいと思います。相州古文書なんかにもないような史料があるという話も聞いています。非常に少ない史料ですので、一点でも二点でも載せられるものは載せていきたいと思います。

司会　どうもありがとうございました。それでは、近世について大口さんよりお話をしていただけませんか。

大口　近世は、地元に残っている江戸時代の古文書を中心に、この地域の歴史を考えてみたいと思っています。寒川町の近世史料については、これまで神奈川県史の編さんで調査が入っていますけれども、それはほんの一部分で、この一年間の町史の調査では県史の目録にない古文書が出てきています。

これまで町にありながら、土蔵の奥や長持の中にずっと埋もれていた江戸時代の古文書が、今回の町史の編さんを機会に初めて表に出たことは、大変大きな意義になろうかと思います。

福さん過程で忘れてはならないのは、江戸時代には何も今のような行政区域があったわけではないことです。高座郡あるいは相模南部一帯の地域史として、一つのまとまりをもっていたわけですから、近隣の市、茅ヶ崎市、藤沢市、平塚市などの市史編さんの事業とも密接に連携をとっていきたいと思います。



大口

この一年間、近世史のほうでやったことは、何よりも古文書を調査することです。どこの家にどういう史料が残っているか調査して、それをお借りして、消毒して、写真に撮り、その目録を作る。そして、その目録の中から、大事な史料については筆写してすぐに使えるようにしておく。写真を撮ったものは焼き付けて製本して、保存できるような形にする。こういう作業をしてきたわけです。

そして、今までのところ二八軒のお宅にあった、近世、近代合わせて、約五、〇〇〇点ぐらいの史料について写真に撮って目録を作るという作業が行なわれています。これはまだまだたくさんありまして、まだ数年続けていかなくては町のなかに残っている史料を全部明らかにするわけにはいかないと思います。そのなかでどういう問題があったかということは、おいおい筆写史料を基にしてこれから見ていかなくてはいけないところですが、いずれにしてもすべてが村の生活、あるいは当時の江戸時代の人々の生活を知る重要な資料だと思います。

司会　これまでの調査で特に注目すべき文書をお持ちのお宅はどこでしたか。

大口　これまで調査したなかで、最も点数の多いのは一之宮の入沢さんのお宅に残っていた史料です。江戸時代後期に幕府は関東地方の治安取締りのために組合村という組織を作り、その中心を寄場と呼びましたが、その寄場の史料が入沢さんのお宅にかなりまとまって残っていることがわかりました。それによって、この地域の村々が幕府によってどういうふうに治められていたのか、いろいろな犯罪の取締り、犯罪人の逮捕、拘留の仕組みなど分かってくるのではないかと思います。

寒川には城下町や宿場町のように中心になるところがないから、特徴がつかみにくい。また、一人の殿様によって治められているわけでもありません。この地域は旗本領の村が多く、それも相給といって一つの村に何人もの旗本が知行地を持っているのが特徴です。そういう非常に特殊な支配の仕方をしている旗本と村との関係も、史料をひもとくことによっていろいろ分かってくると思います。

また、この地域は、江戸町奉行で有名な大岡越前守忠相や老中田沼意次も、ほんの一時期ですが、この地域の領主であった時代があります。

これらの村の、古文書を見ることによって何か新しい事実が出てくるのではないかと期待をしています。

佐藤　寒川の古文書でいちばん古いというと、いったいいつごろまで上がれるんですか。

大口　小動村の天正二〇年（一五九二）の検地帳が残っています。ただし後の写しでして、原文書では、岡田村の慶永八年（一六三一）の名寄帳が今まで見たところでは古いようです。

司会　ありがとうございました。古文書の整理については、近世と近・現代で一緒に行っているようですので、それ以外の部分、特に寒川の近・現代史の位置付けなどについて、内海さん、お願い致します。

内海　寒川の歴史といいますと、すぐ寒川神社を思い浮かべがちで、われわれ近・現代史の立場から言及することはあまりないのではないかと当初は思っていました。ところが実際に調査を進めてまいりますとかなり重要な側面で、日本の近代の歩みと足並をそろえるような動きが歴史の節々であるような感じがしてきました。というのは、たまたま昭和六二年（一九八七）の三月いっぱいで日本国有鉄道が解体されましたが、それ以前に、寒川を貫通している国鉄の相模線をまず、調査してみようということになりました。国鉄が解体して、国鉄の持っていた資料が散逸される恐れがあったためです。



内海

茅ヶ崎市史でも相模線関係の調査がおこなわれていたわけですが、必ずしもそれは完全ではなかったように思われます。そのために今回はなるべく完全を期すべく調査をしまして、相模鉄道の本社から国鉄の本社、それからそこではみいだせない資料については交通博物館などでの調査をおこなって、現状で把握できる範囲の相模線関係のオリジナルの資料を収集できました。今後、それをどう読んでいくかということが問題ですけれども、少なくとも国鉄が解体される前に相模線についての資料を調査しえたのではないかと思っています。

では、なぜ相模線が重要なのかということです。鉄道というのは旅客を運ぶという目的があるわけですが、相模線の場合には、相模川という非常に大きな川があって、そこでの砂利採取、運搬が鉄道を敷いた要因になったのです。明治末年からは、日本の建物が洋風建築、特にコンクリート建築が出てくるわけです。それにはセメントと砂利が基本的に必要な

わけで、その供給源として相模川が注目されだした。最初は多摩川流域だけで供給できたんだろうと思いますが、だんだん東京のみならず、横浜とか大都市圏が形成されてくる。あるいは京浜工業地帯が形成されるといった日本の都市化、あるいは工業化の動きに対応する形で、相模川の砂利が注目されだしたわけです。それが、大正中期に相模線が実現していく大きな契機になったのではないかと思っています。さらに関東大震災後、東京・横浜といった大都市復興のために、砂利需要は大きく高まったといえるでしょう。

ですから、一見、寒川神社だけに代表される地域なんですが、確実に日本近代の大きな流れのなかで対応しているような感じがするわけです。もっと身近な例でいえば、相模川の寒川で取られた砂利が大船の観音様の原料になったり、あるいは明治神宮の造営の砂利になったりとか、ある意味ではここではふだん忘れてしまっているようなものにも使われていることが、調べていくなかで分かってきました。ですから、オーバーにいえば寒川という地域が大船の観音様を支えている、明治神宮を支えているという別な意味も持っているようにも思っているわけです。これはほんの一例ですけれど。

司会　寒川の砂利が、大船の観音様や明治神宮と関係があったというのは面白いお話ですね。

その他に何か目玉になるようなものはありませんか。

内海　寒川にやってきますと、豊かな田園風景とならんで、大きな工場があるのが目につきます。おそらく、誰でも気付くことでしょう。それは、旧来からの地域共同体的な農村地帯ときわめて異質な風景を現出しているわけです。しかし、それは確実に寒川のなかに根づいている。そこで、寒川の工業団地を代表するような工場を一日二箇所ずつ、なぜ寒川にきたのか、どうして寒川を選んだのかといったような、さまざまな動機と現況をたずね歩いて、寒川と工場とのかかわりをみていきました。そうすると、ここにも寒川だけではとらえられないひとつの大きな歴史の流れに遭遇したわけです。

昭和三五年（一九六〇）の池田内閣による所得倍増計画で日本の経済の方向は、農業を中心とする経済から重化学工業中心の経済へ転換していったことはご承知のとおりですが、その計画が出される以前、昭和三四年（一九五九）ぐらいから寒川周辺を中心とした相模川流域に工業団地を造成してはどうかという形での国、あるいは神奈川県側の動きが出てくる。

隣の茅ヶ崎市では、昭和二九年（一九五四）に工場誘致条例ができていることに比べると、少し遅れているのですが、田の誘致対策に呼応しようとしている。そうすると池田内閣の所得倍増計画以降の日本経済の工業化への問題が、むしろそれ以前から神奈川県域で出ていて、その動きに対して寒川

町はなんらかの形で対応していかなければいけないという町自体の町政の方向を確かめていくのがこの時期です。

そのような国の方向に対して寒川は時代の趨勢という形で対応していくわけです。その結果、昭和三九年（一九六四）に寒川工業団地（一五ha）ができていくわけですが、それは町政からみれば成功したといえるでしょう。

一見、旧村のレベルのままであるような寒川だけれど、一方では新しい波にきちっと対応している。だから、今日、高座郡ただひとつの寒川町として存在しえているのは、歴史の新しい波に乗れたからではないかということを痛感するわけです。もっとも、昭和六二年という現在はどうかというと、少し様子がかわると思いますが……。

児玉　ところで去年の夏、寒川神社の史料調査をなさいましたね。その印象はいかがでしたか。

内海　寒川神社の調査では、明治以降の史料がたくさんあることがわかりました。しかも、それはかなり通年的にそろっていて、とりわけ社務日誌が豊富でした。これらのことは、従来ほとんどわからなかったことです。

そういう意味で、近代のなかで神社をどうとらえるかという問題が今後の調査で非常にクリアで出ているのではないかと思います。同時に戦後の神社の動き、つまり戦後、国家神道から自由になった神社が独自に生きなければいけないという運命を負わされたわけですが、そのなかで寒川神社がどう生きていったか、いわゆる神社の「経営」問題として近代のなかで、あるいは現代のなかで神社をとらえていったら非常に面白い問題ではないかということを感じているわけです。

深い意味づけというのは今後の課題になると思うのですが、身近な問題から調査することによって、かなりいろいろな問題がみえてきたというのが、近・現代の現状です。

司会　井羽先生からは何かございますか。

井羽　内海さんのお話の補足として、私は、部落（自治会）所蔵資料について少し述べたいと思います。



井羽

寒川町は、昔の旧村にあたる十一の部落から構成されており、それに最近新しい住宅団地が付け加えられつつあるのが現状です。近世期に住民の生産や生活は、村を単位として営まれたわけですが、近代に入ってもこの旧村は、依然として住民の生活共同体としての機能を果たしてきたと思います。

したがって、旧村＝部落が所蔵している資料は、そのような共同体としての営みを通じて作られてきたわけで、近・現代の町史を編さんするうえで、見逃せない大事な資料です。

町内のどの部落（自治会）にも、自治会長持ち回りの形で、昔からの資料が引き継がれてきていると思いますが、六一年八月に採訪にうかがった田端自治会には八八三点におよぶ資料が所蔵されていました。その中で一八点が近世文書で、残りすべてが明治から現在にいたる間の資料でした。この内容をみると、明治以来の貴船神社のお祭りやそのときの村芝居興業の運営、虫送り行事の費用徴収などがわかる文書があり、明治末から昭和にいたる青年会の活動日誌も保存されていました。この他、時代を反映した色々な資料もみられました。

日露戦争のときは部落で遺族の生活援助をしており、大正期には、相模川出水で大破した堤防の修理に出役したりしています。太平洋戦争時になると、物資配給統制や供出に関する書類が急に増え、国民貯蓄組合が結成されています。

昭和一九年（一九四四）には、血液型別に人名簿が作られたり、萩園報告（茅ヶ崎市）の用地などについての書類があって、戦局が切迫してきたことを感じさせます。戦後になると、復員軍人や戦災者、引揚げ者についての調査がなされ、昭和三四年（一九五九）頃になると日本住宅公団による工業団地の造成が始まり、工場による作物被害調査がなされていたこともわかります。

このように部落に保存されている資料は、村民が肌で感じた時代のうつり変わりを最もよく反映しているのではないでしょうか。古老の方たちの話を聞きながら各自治会が持っている資料から町史を組み立てていけば、寒川固有の生きた歴史が編さんできるように思います。

もっとも、田端自治会ほど豊富に資料を保存している自治会は、他に余りないようですが、これからも是非各自治会の方々にご協力願って、少しなりとも保存しておられる資料を提供してはしいと思います。

司会　では、つづきまして民俗の方で、宮本さんお話をしていただけませんか。

宮本　民俗編を担当させていただくことになりましたが、私自身寒川町の民俗に関しては、全くの素人であるため、現在一から勉強し直しているところです。ですから今のところ、確固たる編集方針を持っているというのではなく、模索している段階です。

そのため、現在継続中なのですが、十一の大字ごとの民俗調査をすすめ、各地区の概略を知った上で、民俗編のまとめを想定しながら、本格的な調査をすすめていく予定です。

民俗とは、文書に残りにくい日常生活そのものと言ってよい事柄のため、各地区の古老の方々から若い頃の、あるいは親から伝えられていることなどのお話をお伺いする「聞き書き調査」を主たる方法としております。町史の中では、最も住民の方々のご協力が必要な分野といえます。

また、町史の民俗編は歴史でいいますと、史料編と通史編を合わせ持った性格があり、現在調査員を依頼しようと考えております方言、芸能を含めて、特色あるものにしたいと考えております。また、住民の方々が肌で感じていると思われます地域差に伴う民俗の異同、この点は、周辺市町村、さらには神奈川県、関東を視野に入れることも必要になると思われますが、そうした民俗の異同を明らかにすることが一つの課題であろうと予想しております。



宮本

それから丹羽先生や内海先生の近代史と深くかかわってくるだろうと思いますが、寒川町における民俗の変貌を描き出せたならば、特色ある民俗編が出来るのではないかとも予想しております。この点は今までの経験からして、第二次世界大戦と、昭和三〇年代後半以降の高度経済成長が変貌の目安になると思いますが、さらに大正一二年（一九二三）の関東大震災が目安の一つになるような感じを持っています。

しかし、その一方で、古くからの習俗で現在でも続けられているものがかなり認められます。そうした民俗を維持してきた要因なり、理由なりを少しでも明らかに出来るならばと期待しております。

何か希望的観測ばかりをお話することになってしまいましたが、こんなところが現在の状態です。

司会　どうもありがとうございました。各部門ごとに編さん事業の経過をお話しをしていただきました。

四、資料の保存と活用の方策

司会　次に町史で収集した資料の保存や活用の方策という問題についてご意見を聞かせていただければと思います。この点ではこれまでいろいろな地域でご苦労なさっています児玉先生からまずお話をしていただきたいと思います。

児玉　寒川町としては古代、中世の史料が足りないと思うのです。そういう点では町史をまとめるのもなかなか困難だと思いますが、幸いにも近世以降は、資料を保存しておられる方が何人もいらっしゃいました。また、近・現代の史料も必ずしもないことはない。ところによると行政文書をほとんど廃棄してしまって何もない市町村もあるのですが、ここはそれほどのこともないようだし、いまお話の相模縦関係の資料なども新しい発見でした。町史という段階で言うと、資料は決して少なくないと思われるわけです。資料をどうするかということを、これから町としても考えていただかなくてはならない。少なくとも町史編さんが終わった段階には、結実

しているようなことにしたいと思います。

ご承知のように、われわれはもう二〇～三〇年も前から、少なくとも都道府県の段階では必ず文書館を作り、市町村の段階ではできるだけ作るというような形の法律の制定を求めてきました。

そういう運動をやって、学術会議から国に対して二回にわたって勧奨したのですが、実際にはなかなか実現しない。そこで今は参議院議員の岩上さんにお願いして、議員立法にでもしていただこうとしているのです（参考資料）参照）。岩上さんは茨城県知事をされ、また同県立の歴史館の館長をされたこともあって、その方面に深い理解をお持ちの方です。

ただ、この運動のせいだけではありませんけれども、資料保存ということについては、かなりの県が積極的にやってこられた。東京都は非常に早くから、東京都公文書館というのを持って、行政文書もそこへ入ることになっています。

戦後できたのでは、埼玉県が立派なものを作っていますし、群馬県も作っています。千葉県も来年オープンします。福島県でも第三セクター方式でやっています。茨城県は歴史館という名前でやっています。そんな具合に各地でできています。

ただし、神奈川県の場合は県史編さん中に要望書を出したのですが、文書館まで行かなくて、文化資料館という図書館の一部局になっています。それでも一応、県史で集めた資料はそこにあります。そんな具合で県段階ではかなり進んでいます。

市町村段階では藤沢市が全国に先がけて市立の文書館を持って、いろいろな仕事をしています。そういう気運がだんだん所々で起こっています。川口市がいま、作ろうと計画していると思います。

戦前の県史編さんで非常に悔しまれることは、資料集を作らなかったことで、戦前では非常に模範的だと言われる鹿児島県史でも資料集をまったく作りませんでした。その後、あそこは戦災で全部の資料がなくなっています。愛知県にしても同様です。若干資料集を作ったのは滋賀県史で、これは中世の惣の組織や自治制度などを調べるには非常に貴重な史料が入っていましたので、よく活用されました。福井県史には、ほんの一部ですが、資料を入れています。それは戦前では非常に稀でした。戦後はかつての失敗が基になって、必ず資料集を作ることになっていますが、寒川町史の場合も資料集があることは非常に大事です。けれども、資料集に入るのはほんの一部分です。つまり、何分の一、何十分の一しか活字にはならないわけです。ですから、もし貴重な資料が失われたら、これは大きな損失になるので、ぜひ、資料館なり文書館なり、町として考えていただきたい。

それに関連して伺いたいのですが、近・現代の史料、特に行政文書はどの程度保存されているのですか。

司会　内海先生いかがですか。

内海　行政文書については、役場の地下に書庫があるんですが、町議会議事録がかなり残っています。ただし、保存状態が必ずしもよくない。片隅に置いてあるというだけで、すぐ取り出せるという状態ではまったくありません。戦前期、あるいは従来の永年保存文書はあることはあるのですが、とにかく状態がきわめて悪いので、早急になんらかの手を打っていかないと、特に現代文書は和紙を使っていませんので、紙が傷んでいたり、あるいは破損している部分がかなり見受けられます。そういう意味で、行政文書をきちっと整理していくという方向がたいへん必要です。これは、町史編さんの過程でまず行うべきことのひとつでしょう。

同時に、かつて町長をやられた、あるいは助役をやられた方々が自宅に持っておられる文書がかなり最近、確認できています。いずれも皆さんから、それらの資料を保存していただくならば、提供してもいいという好意的な発言もございますので、是非、それを生かしていきたいと思っています。

しかし現在、それらを保存、管理できる場所が町役場の中にないということは致命的な問題です。安心して預けられる、あるいは保存できる場を確保していくことも、町史編さんの大事な仕事であろうと思います。

児玉　とにかく行政文書はきちっと保存する必要があります。最近情報公開ということが言われていますが、それに対応できるような施設を作っていく。それらができれば、個人で所有しておられる方が寄贈されたり寄託される場合もたくさんあるわけです。神奈川県の文化資料館の場合もそういうのが若干ありますし、藤沢の文書館の場合は非常に貴重な資料、福本和夫とか荒畑寒村とか昭和の初めの左翼のそうそうたる人たちの文献が納められているし、内務省の嘱託をしておられて非常に資料を集められた金沢基衛さん方の資料も文書館に入っているわけです。そういうふうに今、完全に保存できる場所があれば、置き場所に困っている方はたくさんいるのですから、行政機関の文書だけではなく、それらの資料も入る可能性があります。

もう一つ、行政文書のことですが、古い時代は隣村の庄屋の家のものであっても推測がつくわけです。領主が同じであれば租税の決め方とか御触れは皆、同一なわけですから、近所の村の史料でも間に合うのですが、明治から後になると、町村の資料は隣の村のではぜんぜん役に立たない。どうしても自分のところの資料を保存しておかないと、これからあと何年かたって、一〇〇年史を書こうなどというとき、書けないのです。ですから、基本的な資料は、必ず保存するような方法をぜひ、講じていただきたいと思います。できればそれ

を印刷しておくことが必要です。というのは、文書館がただ、所蔵する場所だけではなくして、それを逐次活用していく、あるいは整理して利用できるようにしておくことが必要だからです。そういうことをわれわれの要望として出したいと思います。

司会　今の児玉先生と内海先生のお話は行政文書や古文書のことが中心だったと思うのですが、他にご意見がありましたらお願いします。考古部門では色々な埋蔵物が出土していると思いますが、その保管・活用についてどのようにお考えですか。

木村　私共考古学のほうでは、埋蔵文化財ということで一所懸命、土器や石器などの遺物を収集しており、今後も発掘によって得られた多くの出土品が町に収蔵されることになると考えられます。ところが、これらの展示、活用ということになると、ごく一部が町民センターロビーに展示されているだけで、あとは地下の倉庫に入ってしまうというのが、現状です。ですから、至急に資料を陳列する場所を作ってほしいと要請してまいりましたが、町の第三次総合計画では建設する予定になっているということですので、文化財の保護、活用の面でも大変有り難いと思います。

宮本　民俗学の立場からも一言発言させていただきたいと思います。民俗関係の資料保存という点では、一つは民具の保存が挙げられます。これも民家の新築、改築に伴って破棄される場合が多く、寒川町の場合も時期的には、既に遅いようにも感じられますが、早急に収集する必要があると思われます。事務局の方にお聞きしますと、教育委員会でかなり集められているようですが、未整理の状態であるということです。民具を通して生活を明らかにするためには、民具の人手方法や形態、使い方までを記して資料整理が望まれます。

さらに、民俗全般についての資料保存という点でいえば、現在、映像民俗学がようやく成立してきておりますが、行事などは写真、ビデオあるいは録音などによって記録しておくことが必要であると思われます。祭りや芸能のもつ雰囲気までも正確に伝えることは文章では難しく、文字による記録化とともに映像、録音によって記録化しておくことが最良の方法といえます。また単に祭りや芸能ばかりでなく、幾つかのテーマを設け、そのテーマに従って一年間のくらしを記録化しておく必要があり、そうすることによって、郷土の歴史、民俗を生きた教材として利用してもらうことができると思います。

また、町史の民俗編との関係で、民話とか噺子、あるいは伝説に関しまして、実際の語りを録音し、それをソノシートやレコードなどにして付録として付けたならば大変特色あるものになると思うのですが。

司会　いろいろなご意見を賜りましたが、時間の都合もございますので、そろそろ終わりにさせていただきたいと思います。

いずれにせよ、町民の方々に親しみを持ってもらえるような町史を作り、そしてそれを活用できるようなしかるべき組織を作り上げていく。われわれはこの目標にむかって努力を惜しまないつもりである、という点は再確認できたんじゃないかと思います。



山田

山田　今日はお忙しい中、どうもありがとうございました。私をはじめ事務局といたしましても、このようなお話を受けまして、一所懸命やってまいりますので、今後とも御指導の程、よろしくお願い致します。

〈昭和六二年四月一〇日〉

〔参考資料〕公文書館法について

座談会の中で話題になっていた「公文書館法」が昭和六十二年十二月の臨時国会で成立しました。

この法律は、公文書も貴重な歴史資料であるという考え方のもとに、これらを保存してより多くの人々の利用に供するため、必要な制度や施設の整備をはかるという趣旨のものです。

今後多くの自治体でこの法律に基づいた歴史資料の保存利用機関が設立されることが予想されますが、一方専門職員の養成制度や、資料の収集・整理等の実務の体系化など、これから解決せねばならない課題も多い模様です。

この場を借りてその条文をご紹介しましょう。

公文書館法（昭和六十二年十二月十五日公布）

（目　的）

第一条　この法律は、公文書等を歴史資料として保存し、利用に供することの重要性にかんがみ、公文書館に関し必要な事項を定めることを目的とする。

（定　義）

第二条　この法律において「公文書等」とは、国又は地方公共団体が保管する公文書その他の記録（現用のものを除く。）をいう。

（責　務）

第三条　国及び地方公共団体は、歴史資料として重要な公文書等の保存及び利用に関し、適切な措置を講ずる責務を有する。

ISSN 0914-8043

寒川町史研究

1999

第12号



〈特集・町史編さん資料の保存と活用〉

座談会・寒川町の資料保存と活用について

――町史編さん事業のあとにくるもの――

一　町史編さんの軌跡と収集資料
二　資料保存機関としての文書館・史料館
三　寒川での望ましい組織
四　おわりに――町長へ提言を――

〔座談会出席者〕

総括編集委員　児玉幸多
主任編集委員　圭室文雄（司会）
宗教・近世担当編集委員
考古担当編集委員　木村　勇
古代・中世編集委員　鳥養直樹
近世担当編集委員　大口勇次郎
近・現代担当編集委員　山本弘文
近・現代担当編集委員　内海　孝

一　町史編さんの軌跡と収集資料

司会（圭室）　本日は、お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。さっそくですが、町史編さんをめぐっての資料の保存と活用についての座談会を始めたいと思います。

まずは、町史編さんの軌跡と収集資料についてです。これまでの資料調査の経過や成果を部門ごとにお話いただけませんか。あわせて刊行物の編集をふりかえって、その意義やねらいのようなものもお話をいただければと思います。まずは考古からお願いします。

木村　別編「考古」を担当しましたが、今までの遺跡、遺構、遺物などの考古資料をもとに寒川町の歴史を記述しました。寒川の考古学の調査は、古くは明治四十一年（一九〇八）

に岡田の大（応）神塚古墳が発掘されたことに始まります。以来、今日まで多くの調査がおこなわれており、それらの報告書を参考に編集をいたしました。


木村委員

司会　町史を担当をされてから、発掘調査をおこなったとか、新しく発見されたものとか、とくに注目されたものとか、そういうものがありますか。

木村　町史の編さんのために発掘調査をしたということはありません。すべて教育委員会がおこなった調査です。開発行為または建築確認等による事前協議で、その場所が埋蔵文化財の包蔵地として指定されている場合は、事業主は文化財の調査をしなければなりません。教育委員会の調査というのはほとんどがそういうケースです。

その結果、いろいろすばらしいものが出てきました。それを町史に生かせていただくことができたというわけです。たとえば、岡田遺跡では旧石器時代の黒曜石のナイフ形石器が出てきましたし、縄文でも全国有数の住居址数をほこる大集落の跡が見つかりました。弥生時代では倉見才戸遺跡で床面積の広い住居址が出てきました。これらの遺物の大部分は文化財学習センター（一之宮小学校内）に保管され、土器の復元も進められていますが、さらに早く整理をし、公開したいと思っています。

司会　ありがとうございました。それでは、古代・中世についてお願いします。

島養　私の方は、資料が少ないという状態でした。古代の中央の資料のなかに直接寒川町域のことが登場することはほとんどありません。資料編の編集にあたっては、相模国または高座郡全体の動きを示す資料を関連資料として収めたほかに、寒川神社が相模国内において特別の地位を占めていたことを示すいくつかの資料を載せました。中世では、鎌倉幕府の創建以来、源頼朝の重臣として活躍した梶原景時の本拠が本町域にあったので、梶原一族に関する資料をできるだけ多く集めました。戦国時代は、小田原北条氏関係の資料を集めました。寒川神社には、北条氏綱が大永二年（一五二二）に再興したときの棟札がありますが、それ以外に直接的な資料はあまりないので、その関連資料をまとめました。


島養委員

これらの編集の基礎となったのが、旧一一か村の悉皆調査でした。これまで町にありながら、土蔵の奥や長持の中にずっと埋もれていた古文書が、今回の町史編さんを機会に初めて表に出たことは、大変意義深いことだと思います。近世史料を持っていた個人や神社等は六九件、あわせて三千点あまりになりました。

司会　これまでの調査でとくに注目すべき古文書をお持ちになっている方はどこでしたか。

大口　近世文書の点数が最も多いのは一之宮の入沢さんのお宅です。

司会　どのような特徴がある文書ですか。

大口　この家は江戸に進出して薬種問屋を経営していた豪商で、その経営資料が豊富にあります。また一之宮村の村役人として、先に述べた宿場の運営に関わったので、その関係資料もたくさん持っておられます。

司会　ありがとうございました。次に、近・現代を担当していただきました、山本先生いかがですか。

山本　私は、途中からメンバーに加わりましたので、あまり資料調査をいたしておりませんので、収集の苦労を知りません。内海先生が実際に調査されましたのでお願いいたした


大口委員

で、一宮を知行した山角氏の関連資料を多く集めました。

私は、かつて『大和市史』通史編の古代を担当したんですが、大和はもっと古代の資料が少ないので苦労しました。寒川神社の資料がある分いくらか楽だったかも知れません。

司会　新しい発見は何かありましたか。

島養　新しい発見というわけではありませんが、南北朝・室町時代の鎌倉府との関係に着目すると、梶原氏の子孫が活躍していることがわかります。資料編ではあまり盛り込むことができませんでしたが、いま編集中の通史編でその成果を反映させたいと思っております。

司会　どうもありがとうございました。それでは、近世についてお話をしていただけませんか。

大口　近世については、資料編を三冊出しました。このうち一冊目は、初めに高座郡の村高と領主をすべて載せて、本町域の村々がどのような地位にあったかを示し、次いで地誌と領主に関する資料を集めました。そして二冊目に村のようすがわかる資料を収め、三冊目は、近世後期に一之宮村が「宿場」として治

いと思います。

内海　近世部門と合同で、個人蔵文書の悉皆調査をおこないました。その結果、現代の寒川につながるような独特な動きが近代以降かなりでてきたということがわかってきました。たとえば現在ではほとんどみられない砂利採取、これは近代社会をささえるかなり重要な産業のひとつでした。大正期になると、従来米と生糸だけの生産だったところに、メロンなどの栽培、野菜生産という新しい都市近郊農業の側面が加わって、神奈川県全体の近代あるいは、現代につながるような新しい独特な農業の動きが調査の段階で、新しい事実として認識されることがありました。それらを裏付けるような資料がでてきたのです。

その史料群は私たちが生きていくうえでかなり重要な指針になっていく。あるいはその先人たちの知恵と伝統をおおいに活かしていくこともできる。ですからこの事業を始めた当初、単一的なイメージしかなかった寒川の近現代の歩みが、資料調査の過程で、従来にもましてその固有の歴史と事実、かなり独特な色合あるいは個性のある町の動きがあったことがかなりわかってきました。それは十数年間にわたる町史編さんの活動があったからこそ再認識させられたことです。

その意味で、今まで収集されたり、またこれからも収集されなければならない資料が数多くあるはずですが、それらをきちんと保存して後世に活用していただくということが、これからの現場の使命だと思います。

司会　はい、ありがとうございます。

山本　ごく一般的にいいますと、寒川町でなくとも日本の地方自治体の公文書がどんどん失われつつあります。明治二十二年（一八八九）の町村制の施行以後は文書規程ができますが、文書規程というのは文書保存規程でなく文書廃棄規程なんです。文書に保存期限をもうけて、永年保存と、二年、五年、一〇年と期限をもうけ、それから担当者が期限にもとづいて廃棄していかなくてはならないようになっております。だから庶務に忠実な文書担当者がいるところほど整理されて、文書がなくなっています。これは見様によっては近世よりも近代のほうが資料がないんです。近代になると国や県の中央資料が割合多くみられるかもしれませんが、地方自治体の村や町の顔が書けない。自分たち独自のものがないわけですから。その自治体史を書く場合は県の資料や文書をみながら結局、骨と皮ばかりという感じで、顔形ができあがらない、そういう感じがするんですね。

私の場合は、取手市史、日野市史、南足柄市史をてがけ、寒川で四か所目です。他を全部書き終えてみて、その町の顔がちゃんと書けていない。そういう思いが残っています。これは結局、その町のようすを具体的に描けるような資料が不足しているためです。

全体を通して戦後の資料が少なくなってしまって非常に残念に思います。今後は、行政資料をどのように選別して保存し、公開していくかが非常に重要な問題になると思いますね。選別には非常に人手とお金がかかるため、どの自治体も二の足を踏んで、必要性がわかっていてもなかなかやれないのだと思います。現用文書で保存年限の切れたものの中から選別収集する。二〇年ぐらい一定の年数を置いて、さらにその中から必要なものをふるいにかける。その作業は、学識があって選別能力のある人を何人か置かないとできないわけです。私も神奈川県庁で一度やったことがあるんですけども、選別作業は大変な重労働なんです。

ところで、公文書以外に目を向けると、自治会資料などのなかに市民生活に直接関係のある、たとえば戦争中の配給物資でハミガキ粉とかそういうものまで取り込んでいる資料がある場合があって、一般市民の生活を明らかにしてくれる、おもしろい貴重な資料なのです。寒川の場合は、資料調査の頃からやっていないのでわからないのですが、私がみた範囲内では市民生活に関する資料が少ない。行政資料、日記類などが少ないように感じました。


山本委員

児玉　圭室さんは、高野山、出羽三山などで調査をおこなっておられますね。その話を聞かせていただけませんか。

圭室　宗教史を担当しまして、まず町内の神社やお寺の資料の所在を確かめました。町内で比較的多くの資料を持っていたのは寒川神社でしたが、他の社寺はあまり多くありませんでした。地元にないなら、本山その他の霊場にあるだろうということで、県内では伊勢原市、これは大山関係の資料です。それから鎌倉市、逗子市、大井町などの社寺を調査しました。県外では山形県の出羽三山。ここにもやはり寒川の人びとが参詣している。それから福井県の永平寺です。永平寺の資料からは、明治期の町内の曹洞宗寺院の檀家の氏名を記した資料がありました。三重県は、伊勢講の関係です。三重県神社庁、伊勢市立図書館などいろいろなところに、御師の関係資料がありました。それから和歌山県は高野山高室院で、高野聖と相模国の人たちのつながりを示す資料がたくさんみつかりました。香川県は、琴平で、明治初期に金毘羅参りをした人の名簿を確認できました。いろいろなところで、多くの皆さんにご協力をいただきまして大変感謝しております。

このように地元に資料がないなら、よその資料で補完する。


主宰委員

これも市町村史のひとつのやりかたではないかと思います。しかしそれ以上の成果を産んだのです。たとえば高野山の高室院と慈眼院の「檀通帳」とか「登山帳」と呼ばれる資料には、江戸時代の神奈川県域の登山者の苗字約五万八千人が記されています。それからもう一つ近場でいいますと、伊勢原市域に大山講の資料がかなりありまして、御師と檀家との関係が広域的によくわかります。これまで集まった資料を寒川町で抱えこむのではなく、将来的には庶民信仰の資料センター的な役割を果たして、多くの方が利用できるようなことになればと思います。

内海　そういう調査でのやりかたと関連するのですが、なぜ、近代で町内の悉皆調査をしたか。それは、あるはずの町役場内の公文書がかなり失われていたという現実があります。そこで町内の旧家や、行政に関わる役職を務めた人の家などを調査しました。関東大震災とか、庁舎の建て替えとかで資料が失われたうえ、戦争が終わった段階の、GHQが来るまぎわで資料を焼却したという話を聞くにつけ、悉皆調査の必要性が増したのです。

山本　終戦直後に資料がなくなったのは、ひとつは軍閥係、もうひとつは、紙が不足したため古文書を使ったり、紙屑屋に出したりしたためです。

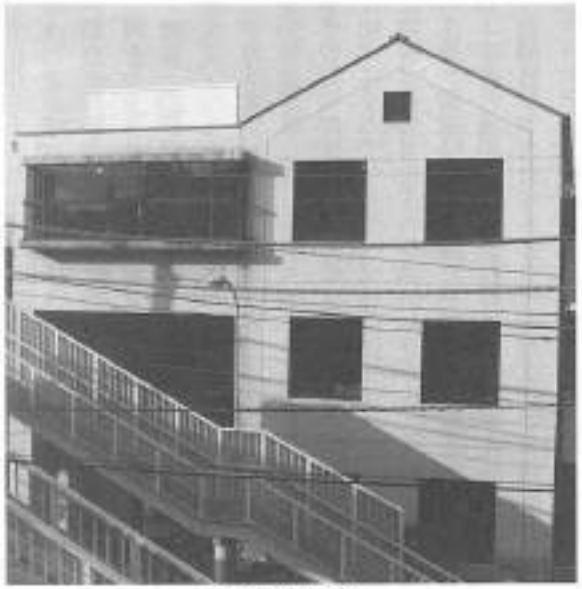
内海　その意味で、行政としては、みずからの町の資料を主体的にどのように保存するか考えなければいけないし、いままでの歴史的経緯と教訓から得られたことは、私たちの先人が残してくれた文書や遺物というのが、じつは私たちの生活文化の様子や質を考えさせてくれるだけでなく、私たちのかけがえのない文化遺産であるということを気づかせてくれたことです。

二　資料保存機関としての文書館・史料館

司会　寒川の町史編さんと資料調査について報告していただきましたが、先生方は各地で資料調査や保存に携わってこられたと思います。これから寒川ではどうしたらいいか参考にするため、文書館や史料館等の類似施設のうまくいったところと、そうでないところの事例をお聞かせ願います。

大口　うまくいったのは、昭和四十九年（一九七四）に文書館を開設した藤沢市ではないでしょうか。建物も市の中心にあり、市町村レベルでは最初の文書館です。

司会　藤沢市の場合には、市史編さんが終わって、文書館


藤沢市文書館

に引き継がれたのですね。

児玉　そうです。藤沢の例はすごく納得のいく方法です。市史編さんで集めた資料と、公文書の両方を管理する態勢がただちに計画されました。この設立にあたっては、編さん委員だった私たちも積極的に発言しましたが、それ以上に、市民の皆さん、とりわけ資料の所蔵者たちが署名やら議会への陳情やら、いろいろ働きかけをしたのが大きかった。これで議会も市の理事者も動いたようなものですから。それに職員も熱心でした。これらの熱意が文書館を作りあげたのです。


児玉委員

公文書についていえば、昭和二十二年の地方自治法施行前の文書はすべて歴史資料として移管され、施行後の文書は保存年限を過ぎた文書の中から歴史的価値のあるものを選別して収集していました。これが昭和五十九年からは、公文書の管理・保存業務をすべて文書課から引き継ぎ、現用文書の段階から一貫して文書館が扱うことになりました。

内海　茅ヶ崎市の場合はどうでしたか。

大口　茅ヶ崎市史の刊行は昭和五十二年から五十七年にかけて全五巻で完結しました。しかし、編さん事務局は解散せずに資料調査を続け、市史研究や写真集などを発行してきました。平成四年からは現代資料編の刊行が始まりましたが、そのための調査としてアメリカ国立公文書館等で占領期の茅ヶ崎関連の資料を収集したりしています。他にも史料集を出したり、さまざまなかたちで編さん事業を続けています。一度刊行が終わってもそれがすべてでなく、少しでも多くの資

料を活用するため永続的に本を作っていく。この考え方は見習うべき点ではないでしょうか。

司会　川崎市には公文書館がありますが、詳細をご存知の方はいらっしゃいますか。

内海　川崎の場合は山本先生が詳しいと思いますが、川崎市史は、一九六〇年代に事業が始まり、二巻を刊行し終わっております。その後昭和五十九年に市制施行六〇周年を迎えその記念事業として第二次編さん事業が始まりました。業務はその年にできた川崎市公文書館のなかでおこないました。

山本　そうですね。

内海　川崎市公文書館はいわゆる古文書とか、古い時代の公文書が所蔵されていると同時に、情報公開の窓口も持っていますから現用文書の一部も絶えず入ってきますが、みていて疑問に思ったこともありました。ひとつは、公文書館と市役所本庁とが距離的に離れすぎていて、収蔵の現用文書をまだ参考にする市の職員にとっては、とても不便にみえてしまったことです。二つ目は、市史編さんの業務と現用文書管理の業務とがどのようにかみあい、接点をみいだしていたのかがみえにくかったことです。三番目は人の問題で、専門的な職員が配置されていなくて異動のサイクルが早いと聞いています。そうした場合、レファレンスや収集・整理などの業務に支障がでるおそれがあります。その点、藤沢市の場合、さきほども紹介されたのですが、うまく機能していると思われます。

司会　他に県内の事例はどうなっていますか。事務局でわかりましたらお願いします。

事務局（富木）　県内で比較的早く編さん事業がおこなわれたのは相模原市です。全七巻が昭和三十九年から四十六年にかけて刊行されました。このおりに見つかった資料の多くは、市へ寄贈または寄託されたので、市立図書館に古文書室を設けて、ここで保存と公開がはかられました。合併前の旧役場文書が多いのも特色です。平成七年に博物館が開館すると、資料をここへ移して閲覧機能をもたせるようになりました。

次に大和市ですが、ここはまだ刊行事業が継続中なのですが、平成七年から情報資料室が新設され、市史編さん、情報公開、統計の三つの担当が相互に協力しながら、記録資料全般を扱う体制がとられるようになりました。

内海　鎌倉市の場合はどうでしたか。市史編さんが終わりましたよね。そのあとはどうなったのですか。

司会　鎌倉市史の編さん事業は二回おこなわれ、一回目の中世編は早くも昭和三十三年から刊行がはじまりました。二回目は近世・近現代編ということで昭和六十年からはじまり、平成六年に終了しました。いずれも出版社が発行する方法がとられました。終了すると資料は中央図書館の一室に納められました。

ところで、情報公開制度の話が少しでました。情報公開と歴史資料の保存をセットにして考えているところもあるようです。どちらも公文書を扱うという点では接点があるようですが、その辺はいかがでしょうか。

大口　寒川町の場合、情報公開の関連では何か動きがあるのでしょうか。

事務局　まだ詳細はわかりませんが、検討委員会が組織され、条例の制定にむけて検討をはじめております。

山本　神奈川県では現用文書は情報公開の対象になっていて県庁に窓口がある。歴史的公文書は二俣川の県立公文書館に引き継がれて、一定の年限を経て閲覧できるようになる。歴史資料と情報公開は別の制度ですね。情報公開の対象になる文書は、保存年限が切れて非現用になった時点で公文書館に全部引き継がれます。そこで歴史資料として必要なものを選別していくのです。

司会　県立図書館にあった文化資料館はどうなりましたか。

山本　文化資料館は県史編さんの終了時の資料を引き継いで設立されましたが、図書館の一部局として位置付けられました。これがさらに二俣川の公文書館へ移されたわけです。公文書館設立時に一部の図書類は、地域資料課、通称「かながわ資料室」として図書館に残りました。

司会　他県の動向はどうでしょうか。わかる範囲でお願いします。

事務局　現在、都道府県レベルの文書館は二六都道府県に設置されています。その成り立ちはさまざまですが、栃木県、静岡県などのように、県史編さん資料を引き継いでいる例もあります。

政令指定都市で文書館があるのは、さきほどの川崎の他に、名古屋、大阪、神戸、広島、北九州の五市です。

一般の市町村レベルで最初にできたのが藤沢市文書館ですが、その翌年、昭和五十年に兵庫県尼崎市で地域研究史料館ができています。平成四年に沖縄県北谷町、平成五年に埼玉県久喜市がそれぞれ公文書館をつくりました。今年の秋には、長野県松本市で市史で集めた資料を活用するため文書館ができると聞いています。

また、文書館とか公文書館と名乗らなくても、博物館などの施設に文書館的機能を持たせた例が埼玉県に三つあります。昭和五十九年の戸田市立博物館、平成元年の八潮市資料館、平成六年のえ川市博物館です。いずれも市史編さんで集めた資料を引き継いでおり、とくに八潮市の場合は、文化財保護法、博物館法とならんで公文書館法にも依拠すると条例に明記されています。



全国初の町立文書館・沖縄県北谷町公文書館
役場1階ロビーに設置されている。

三　寒川での望ましい組織

司会　先生方の各方面のご経験や、各地の事例をお話しいただきましたが、寒川では具体的にどうしたらよいのでしょうか。こんなことをやったらいいとか、何かご提案がありましたらお願いします。

児玉　町史編さん事業でこれだけの資料を集めているのですから、はやく住民の皆さんがこれを使って勉強できるようなうまい仕組みをつくる必要があると思います。

木村　考古遺物を皆さんに見てもらうには、展示機能を持った施設をつくらなければなりません。このたび大和市で「つる舞の里歴史資料館」というのがオープンするそうです。市内の鶴間という地区に選定して、そこの考古遺物とか歴史資料などが見られる施設にすると聞いています。文化財保護委員会でもさっそく視察に行って参考にしたいと思います。

山本　どこの管理ですか。

木村　市の教育委員会のようです。

司会　大和の場合はどうかわかりませんが、一般的に教育委員会の予算というものは、学校教育に目がいきがちでして、資料館のような社会教育施設にはあまり予算がいきわたらないという話はよく聞きます。まして、今のように景気が悪くなったら、補助金を受けて建てたとしても、よほどうまく計画を立てないと、その後の運営が思うようにできない事態にもなりかねません。

山本　そうですね。組織のことはよく考えないとね。

司会　大口先生、いかがですか。

大口　景気が悪いと美術館、博物館にしても、予算削減の対象になりやすいと思いますので、そうではなくて町長部局の文書館として設立して、むしろ公文書の管理という業務を含めて継続したほうがよいのではないでしょうか。

司会　公文書の管理と一体になっても、町史資料の保存や活用は引き続きやっていかなければならないし、編さん事業も継続させたい。そのへんはいかがですか。

大口　新しい組織がどのような機能を持つかによって、保存とか編さんの部分が左右されるようでは困ります。そのような機能は必ず盛り込んでほしいし、しっかりと業務として位置付ける必要があります。

島養　私は神奈川地域史研究会にかかわっていますが、あの研究会ができるきっかけというのは、神奈川県史編さん事業が昭和五十八年に終わったあと、それまで集めた資料を保存していきたいという動きが広まってきたからです。県議会に要望書を出したりいろいろやって、とりあえず文化資料館ができたのは、さきほど山本先生がおっしゃったとおりです。ただ図書館の一部局ということで、予算的な制約が目立ってきたので、知事部局へ移すようにと、また運動をすすめました。結果的には県立公文書館が二俣川にできたわけですが、そういう経過をかえりみると、寒川で実施に移す場合、なるべくならはじめから予算の取りやすい形で進めたほうがよいと思います。

ところで横浜市では、横浜市歴史博物館を財団で運営しています。県でも埋蔵文化財センターを完全に財団化する動きがあるようです。財団にして県や市町村の予算から切り離すというのも、実際には問題が出ているようです。教員から財団へ出向するというのは特殊的にもむつかしい問題があって、いろいろトラブルがみられ、県でも課題になっています。市町村でやる場合も、安易な財団や第三セクター化は避け、直営でやるのが望ましいと思います。とにかく人手がいる仕事ですから、その人たちの待遇や専門性が大事です。

内海　いままで資料収集してきた町史編さん課が保存している資料を、今後どのように保存・公開するのか。これはすごく大切にしたい問題です。たとえば、町の公文書は日々限りなく生産されていくのですが、それらをきちんとどのように後世に伝えていくか。今回の町史編さんの過程でその重要性が認識できました。

資料そのものの保存と同時に、いま進めている編さん作業

は町の歴史の一端を書くということになるかもしれないが、それは町史編さん事業のひとつの側面でしかないと思います。では、町史編さんのかなり大きな側面は何であるか。町にとってどういう資料が大切か、足りない資料をどのように収集していくか。これがかなり重要な仕事だったのではないかと思うのです。そうするとさきほど主宮先生からお話があったように、町にない資料は他のところから捜しだし、町に置いておくことも重要な仕事だということがわかります。


内海委員

そのように考えていきますと、編さん物としてまとめる作業と、文書を収集し保存する、さらに公開していくという作業は、一体的なものと考えていかなければなりません。ですから、ひとつの記念事業としての刊行物を出し終えたとしても、それで「町史編さんが終った」とは言うべきではありません。これからは、町史編さんという事業が、町にかかわる記録や記憶を収集・保存し、そして活用するためのひとつの永続する場でなければなりません。それは町の行政のもっとも基本的なあり方としてとらえなければいけないのではないかと思うわけです。

町の行政というのは、一貫性をもって連続的な事業展開をしなければなりません。その連続的な日常の公文書生産を支えるためには、文書館のような組織を作ることによって、現用でなくなった文書でも、必要に応じてそこで保存、あるいは活用されていくというかたちが取られる。でも公文書も町にかかわる記録資料の一部分でしかありません。ですから今まで町史編さんという名でおこなわれてきた個人蔵文書の資料収集と、両方を継続しなければならないのではないか。そういった意味で、情報公開という現実的な要請に対応することももちろん大切ですが、文書館をつくっていくということは、後世の人たちに知的財産を伝えていく行政の責任を果すことになるのではないかと思います。

司会　これからの仕事として、いままでのように町史の刊行物を続けて出していくというのと、保存・活用を推進していくというのと、お話が両方出てきたかと思います。それぞれ具体的にどんな仕事が業務の中核になってくるのでしょうか。

大口　編さんの継続ということでいえば、たとえば『資料所在目録』や『町史研究』は今と同じように出し続けることが大切だと思います。あるいは『調査報告書』も、さまざまな大切な資料にスポットをあて続ける役割をこれまで以上に

果さなければならないのではないでしょうか。

山本　公開に関する業務では、収集した歴史資料を整理して公開するという業務だけですと、範囲が限られてきて、それはそれでとても大変なんですけれど、ある程度やりやすいと思うんですよね。問題はむしろ、これからどんどん出てくる公文書を整理して必要なものを残していく作業ですね。こちらの方がずっと大変です。お金がかかるし、人手もかかる。場所もいる。こちらの方をやっている自治体はまだあまり多くない。その点、藤沢市は非常にうまくいっていますが、そういうことを積極的にやっているところは非常に少ないですね。しかし非常に重要なことで、いま対策を講じないとほとんどの公文書がなくなってしまいます。

私が関係した茨城県取手市の場合も、市史が終わる段階で要望を出して郷土資料館をつくるということで、検討委員会も発足させて、いろいろ意見も出していました。すると郷土資料館では補助金がおりないので博物館にしろということで、博物館にする方針に変わった。それがこんどは博物館ではなく老人ホームをつくるということになって、博物館はたち消えになってしまって、委員会も中ぶらりんになってしまった。今も委員になっているのですが、年に一回くらい電話があり、申しわけありませんと、そういう状況なんですね。

司会　博物館のなかで資料の保存とか活用をしているところもありますが、これについてはどのようなお考えですか。

山本　行政の一般的傾向としては、もし幸いにして博物館が建ったとしても、入館者をたくさん入れたいという志向が非常に強いんですね。入館者が何人だったかと、すぐそういうことから始まるんです。結局テーマパークみたいにしようとか、プラネタリウムみたいな視覚に訴えるものにしたり。古文書なんかは並べるだけではそっぽをむかれる。視覚に訴えるものを、そういう志向が非常に強くなるんです。

でも町史の編さん事業の延長と考える場合では、入館者が何人ということではなくて、現在この状況にある郷土資料を収集して、それを次の世代に伝えていくという責任があるんですね。自治体としての責任です。国でもそういう仕事を続けていくべきだと、私個人は思っているんです。だから、入館者数ということはあまり考えない方がいいんじゃないですか。修史事業の延長として、きちんと資料を整理して保存していくという機能を重視した方がいいんじゃないかと思うんです。

たとえば鹿児島県の黎明館では修史事業と展示による集客事業と両方やってるんですね。修史事業は年に一冊の資料集を出す。これは永久事業なんです。期限がない修史事業なんです。展示の方は旧制七高の跡地に西郷隆盛とか大久保利通らのゆかりのものをいっぱい並べたものができていて、それ

から鳥とか動物とか、自然史関係のものも展示してあります。そちらのほうにはお客さんが集まるので、入館者数で評価されてしまうのだとすれば、こうした施設と併設になるのもやむをえないかとは思います。

木村　寒川の資料だけで年間どのくらいのお客さんが呼べるかわかりませんが、展示を活発にやれば、それを見に来た人にこんどは閲覧もしてみようかなと思わせることもできる。そんな効果が狙えるので、資料館・博物館との併設も、けっして悪いことではないと思います。

司会　これまで私たちは、新しい施設を作ってその中に新しい組織を作ると考えてきたわけです。だけど建物がなくても、組織さえしっかりして、あとは保存庫がちゃんとあれば、保存や活用はなんとかやっていけるという考え方も出てきているようです。まして財政難のいま、そのほうが風あたりは割にゆるやかなのかもしれません。組織改革だけならば、今の組織を若干拡大させるような組織をまず作って、資料を散逸させないようにする。そして、財政にある程度余裕が出てきた時には、建物としての文書館に発展したりする。そんな方法もあると思います。

だけどそれは次善の策です。はじめの目標は高く掲げて、将来計画をしっかり立て、町の総合計画にもちゃんと盛り込む必要があります。そうしないと町長が交替した時でも、継続してもらえなくなってしまいます。

実は私は藤沢市博物館運営準備委員ですが、博物館の規模も決まり、青写真もでき、建てる場所も決まっている。ところがですね、すでに準備委員会だけで一〇年以上もたっている。収蔵品も二億円以上の予算をかけて集めているんですよ。でもまだ建たない。収蔵資料展など立派な展示会を藤沢駅前の市民ギャラリーで開いたりしていますが、ちゃんと計画を立てても、こんなケースもあるのですから、最初の目標や計画を綿密に練ることはありません。

児玉　寒川でもぜひ新しいものを作らなければならないんですが、財政的になかなかむつかしいなら、とりあえず今の編さん課はちゃんと存続してもらいたい。これだけ資料があるから、それを逐次公開して、というような点から推進してもらいたい。これがまず最小限の事業だと思います。建物をつくるということは非常にむつかしい。利益をあげるような組織でなければ評価されにくいです。

内海　ヘボン式ローマ字の考案者のヘボンが、日本最初の和英辞典『和英語林集成』（一八六七年）を活版印刷し、その第三版（一八八六）のなかで、公文書館の意味のArchiveを解説している。それによると「大切なる書き物をたくわえおくところ」となっています。つまり、寒川に引きつけて理解すれば、寒川にとって大切な記録を保存していくところを

私たちが作り、それを後世に伝えていくことが大切だと解釈することができる。ですから、そこから利益を得ようとか、そういう性格のものではなく、自分たちにとって大切なものが公文書、文書館であると。このような意識を職員も町民もみんなが持つことが大事です。

ヘボンの解釈は一九世紀当時のヨーロッパ人の考え方であったと思うんですが、彼らが持っていた公文書に対する考え方というものは、たとえば現在欧米の文書館、とくに地域の文書館に行っても、誰でも、自由に、気楽に利用できる点にあらわれています。私たち外国人に対してもです。それは文書館がまさに自分たちの財産だという意識があるからです。そこから収益を得ようとかいう発想はない。この自分たちの財産を守るという認識を持つことが大切であると思います。

したがって、従来の町史編さんの刊行がおわったあとも、町の財産である公文書を収集・保存・活用するという事業を引き続き進めていくことが、行政としての役目と責任を果たすことになるのです。今後のことも、できればそういう方法で検討していただくのが一番かなと思います。

司会　そういう認識がすごく大切ですね。

大口　組織だけでもとりあえず、というお話もありましたが、古文書の貴重さを考えると、収蔵庫、つまり建物をつくることが、どうしても欠かせないと思うのです。将来的に考えて、町としても大切なことではないか。

山本　そうですね。収蔵場所に躍気があったりしては、古文書にしても公文書にしても、せっかくの資料がだめになってしまいます。収蔵庫だけは必要ですね。

大口　古文書に親しんでもらうことと並行して、きちんと保存することを考えないといけませんからね。

山本　いま寒川では廃棄対象のなかから選別収集した公文書を、学校の空き教室に置かせてもらっているようですが、これはあくまでも、ちゃんとした書庫ができるまでの暫定措置だと考えるべきです。

鳥畳　もうひとつ、職員の問題を考えなければなりません。たしかに財政的に非常にむつかしい問題なのですが、たとえば県立公文書館の場合、専門的職員を長く配置しています。県史編纂室や文化資料館時代からいる人もいます。文書館の運営ではかなり高度な専門的知識が必要になりますが、そういう新しい人をどんどん採用するわけにはいきませんし、かといって作業に必要な専門知識を持った人がいないとだめだし。これはどこの市町村でも同じだと思います。

司会　人事の問題は非常にむつかしいもので、文書館に長期にわたっていると、管理職になれないという問題もおこりますので、これも何か方法を講じておく必要があります。

山本　人事異動で有能な人材がいなくなると業務の妨げに

なる恐れもあるし、継続的な仕事ができなくなってしまうので異動をいやだという人もでてくる。

児玉　わが国の文書館における専門職員は、博物館の学芸員や図書館の司書のような資格制度が確立していません。早期の制度化が待たれるところですが、そうでなくても、地域の記録資料を行政が責任を持って後世に伝えるためには、担当職員の専門性を尊重しなければなりません。安易な人事異動は絶対に避けるべきです。

四　おわりに―町長への提言を―

司会　さて今日は、児玉先生が東京都日野市史編集委員会が日野市長あてに提出した「文書館設立に関する要望書」と、市長からの回答書をお持ちになっておりますので、それについて、ご説明をお願いしたいと思います。

児玉　ここにいる中では山本さんと私が日野市の編集委員をしていました。日野市史は昭和四十七年の事業開始以来、史料編一二冊、通史編八冊を出して、平成十年の春にその幕を閉じました。それと同時に、「文書館設立に関する要望書」を市長に出しました。市史編さんが終った段階で資料をどう保存するのかということで、文書館を作ってほしいという趣旨です。

それにたいする回答書が届いております。それによれば、「将来的には文書館の設立に向けて努力していきたい」と記されていますが、当面は博物館や図書館等の既存の施設を活用して保存・公開をはかるとしています。実際には「ふるさと博物館」という名称の博物館に資料が引き継がれ、将来の公園に向けて検討していくことになりました。

司会　私たちも東村山町にかかわる資料を収集してまいりましたが、この貴重な歴史資料を町役場の倉庫に眠らしたままにすることにはしたくありません。それについて町民や研究者がいつでも利用、閲覧できる施設がほしいと思います。そういう点を町長に申し入れたらどうでしょうか。

木村　考古資料は、古文書と同じ扱いにはならないと思います。現在は一之宮小学校の空き教室を利用して設置した文化財学習センターの一室に収蔵しています。それを何とか順次公開しなければいけないということで、教育長も資料館的なものをつくらなければと常に考えているようです。文化財保護委員会でも、毎年いろいろな施設を視察させていただいており、ますます必要性を感じておりますが、現実となると難しい面も多々あるようです。

私たちが扱った土器などの遺物と、皆様の扱われました文書との接点をみつけるのは非常に難しいのではないのかなという気がしています。唯一方法があるとすれば、文書館的機能と博物館的機能を合わせ持った施設をつくる他にないのではと思うのです。古文書や公文書の閲覧ができて、土器や民具の展示も見られる、そんな施設です。なにしろ今のままでは宝のもちぐされです。



日野市ふるさと博物館

児玉　とにかく古文書や公文書はきちんと保存し、だれもが利用できるようにしなければいけない。また、刊行物を出す仕事も続けてできるようにしてほしい。さらには情報公開の必要性も高まってきます。それらの要望に対応できる施設をつくって、専門的職員を置く。こうした施設ができれば、個人で所有しておられる方が安心して資料を寄付されたり寄託されるケースだって確実に増えていくことでしょう。町当局には、そういう方向で、ぜひ検討していただきたい。私たちが町史編さん事業に賛同して、最大限尽力してきたのも、そういう点を考えてのことでした。

司会　ありがとうございました。私たち町史編集委員といたしましても、児玉先生のご意向に沿うかたちで努力してきたわけですから、町当局も実現にむけて、文書館あるいは史料館の設立にご尽力をお願いしたいと思います。長時間にわたりありがとうございました。

（平成十年八月四日、町民センター講義室にて実施）

ISSN 0914-8043

寒川町史研究

2003

第16号



〈特集・町史編さん事業の軌跡〉

座談会・町史編さん事業

――これまでのこと・これからのこと――

一　町史編さん事業がはじまるまで
二　資料収集と刊行事業
三　今後の刊行物
四　資料の保存と活用に向けて

［座談会出席者］
総括編集委員　　児玉　幸多
主任編集委員　　圭室　文雄（司会）
宗教・近世担当編集委員
考古担当編集委員　　木村　勇
古代・中世編集委員　　鳥養　直樹
近世担当編集委員　　大口勇次郎
近・現代担当編集委員　　山本　弘文
近・現代担当編集委員　　内海　孝
民俗担当編集委員　　小川　正恭

はじめに

圭室（司会）　みなさん、今日はお忙しいところお集まり下さいまして、ありがとうございます。

さて、寒川町の町史編さん事業がスタートして一七年目を迎えました。大勢の方々のご協力と先生方のご尽力によって、町史の刊行も順調に進んでいまして、本編は今年度の二冊を残すのみというところまできました。

そこで今日は、これまで資料の調査・収集や編集・刊行がどのようにおこなわれてきたか、そしてこれからその資料をどのように保存し、町民の皆様に活用してもらうべきか、などについて、ざっくばらんに語っていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

一　町史編さん事業がはじまるまで

圭室　まずは準備段階の話からはじめましょう。ここの

なかでは、私がいちばん早くからこの仕事にかかわらせていただいたので、私から準備段階のことをご紹介してみたいと思います。

寒川町で町史編さん事業を本格的におこなおうという動きがはじまったのは、昭和五十九（一九八四）年度だったと思います。すでに昭和五十五年には、町制施行四〇周年を記念して『目でみる寒川』という本が刊行されています。これは一六〇ページほどの図説集みたいなものですが、残念ながら資料を悉皆的に調べたわけではありませんし、多彩な項目が載っているんですが、それぞれのつながりがわかりやすいとはいえない内容だったので、もう少し体系的なものを作ろうということでスタートしたわけです。町ではまず、藤沢市文書館に相談したようです。で、そこの高野修さんからのご紹介で、私も参加することになったわけです。

昭和六十年度からは企画室に専任の担当者が配置されて、準備体制が整いました。それでまずは、組織を作り上げようということになりました。

まず、編集委員会を置いて、それが実務的な仕事をする組織と考えました。その上に審議会を設けることにいたしました。はじめは「懇話会」という名称で検討していたのですけれど、ようするに、町議会議員さんとか、文化財保護委員の方とか、『目でみる寒川』を編集されたような郷土史家の方がたとか、そういう関係のある諸分野の代表からなる機関を作って、編集委員会がおこなう事業を審議していただこうと計画しました。

それでは、編集委員会のまとめ役としてどなたにお願いしようかということになりまして、神奈川県史をはじめ全国で自治体史の経験豊富な児玉幸多先生にお願いすることになったのです。当時の助役や企画室長と一緒に、先生が館長をなさっていた品川区立品川歴史館にお訪ねして、ご説明しましたところ、ご快諾いただいたというわけです。

児玉　品川においでいただいたのは、いつでしたかね。

圭室　昭和六十年の七月です。そのとき先生は、編さん事業を推進するうえで重要なポイントとして、つぎの四つを挙げられましたね。

まず、町当局の理事者の理解を十分に得ることです。内容の濃い、良い仕事をするためには、立派な研究者を呼ばなければなりませんし、時間をかけて調査もしなければならない。そのためには思い切った予算措置をする必要があるんだということです。

二番目に、事業計画を明確にすること。いつまでに何を調査し、いつどの本を出す、といったことを最初にはっきりさせるということです。編さん事業は大きなプロジェクトで、スタートしてしまうと、なかなかやり直しがききませんから、見切り発車ではいけないとおっしゃったのだと思います。

三つ目は、資料の保存・活用計画です。調査を進めていくうちに、たくさんの資料が出てくることだろうから、その先のことも考えておいてほしいと。つまり将来の文書館につなげていくようなプランを最初から持つべきだろうということでした。

最後は、事務局体制をしっかりすることです。非常勤職員や編集委員に任せっきりにしないで、事務局の職員に古文書の読める者を配置して、資料調査や編集作業などは事務局が責任をもっておこなわないと、事業が立ちゆかなくなってしまうとおっしゃいました。

内海　その四つのポイントというのは、児玉先生が引き受けるにあたっての条件だったと考えてよろしいんですか。

圭室　はい。そう理解しています。当時の藤沢賢一町長もそのことを納得しておられ、町長がその覚悟ならと、お請けいただいたわけです。

内海　なるほど、よくわかりました。

圭室　こうして児玉先生をお迎えしまして、八月から数回にわたって「事務研究会」を開いて基本的な方向性を検討していきました。この研究会は、助役をトップに、教育長、総務担当参事に加え、私たち編集委員候補である研究者が参加したもので、町長みずからが出席してくださることもありました。ここで基本構想や全体計画表を練ったり、審議会・編集委員会のありかたや人選を考えたりしたわけです。そのほかにも打ち合せを随時やりましたから、それも入れたらかなりの回数になるんじゃないでしょうか。

編集委員の人選は児玉先生にお願いしました。地元の研究者である考古学の木村勇先生をはじめ、隣接する茅ヶ崎市史の編集をおやりになった近世の大口勇次郎先生や美術工芸の佐藤昭夫先生、神奈川県史でご活躍だった丹羽尾男先生、古代・中世では大和市史を手がけられた鳥養直樹先生、民俗学の分野では宮本袈裟雄先生、そして近・現代の内海孝先生と、地域の事情に詳しい先生方のお名前をリストアップさせていただき、研究会のメンバーになっていただきました。それが編集委員会につながっていったわけです。

研究会では、いろいろ話し合いをさせていただきました。事務局をどうするとか、アルバイトの人をどのジャンルで何人ぐらい確保して、その手当はどうするかとか。資料の話もでましたが、寒川町域は江戸時代の村で一一か村ときほど大きくなく、町内だけの資料ではたぶんたりないだろうから、町外、これは県内も県外もですが、こうした

ところから補完できるような資料を調査しなくてはいけないだろう、という意見でまとまりました。

そのような過程をへて、昭和六十一年一月、町史編さん審議会が発足しました。その席で基本構想が決定され、事業が正式にスタートしたわけです。

以上のような説明で、間違いございませんか、児玉先生。



児玉委員

児玉　ええ、そのとおりだと思います。僕自身は寒川というところとはあまり縁がなかったのですが、準備の過程で町長以下、町の皆さんが本当に熱心で、立派なものを、そして特徴のある町史を作りたいという熱意が伝わってきました。将来の資料保存ということも、はじめから理解していただけていたと思います。幸い、大勢の方が編集委員になってくださったし、資料にも恵まれたので、ここまで事業を進めることができたのではないかと思っています。

二　資料収集と刊行事業

圭室　ではつぎに、分野ごとに、どのような資料を調査し、編集を進めてきたのか、お一人ずつお話しいただければと思います。時代順にということで、はじめに木村先生。



木村委員

木村　はい。考古を担当いたしました。まず調査ですが、これは町史のために独自で発掘をおこなったケースはひとつもありませんでした。それは、埋蔵文化財の包蔵地に指定されている場所で開発行為などがあると、事業主は文化財調査をしなければなりません。その結果が報告書にまとめられ、遺物は教育委員会の所管になることが多いからです。遺物の多くは、一之宮小学校内にある文化財学習センターに収められています。

町史では、「別編　考古」、「通史　原始・古代・中世・近世」、「別編　図録」などにまとめましたが、ほとんどは報告書などの文献から引用したり、教育委員会の遺物を借りたりしているわけです。ですから、収集資料ということでは、直接手元にあるものはほとんどありません。

それでも、すばらしい遺跡が出てきましたので、それは町史に反映できたと思っています。縄文の住居址数では全国でも有数の岡田遺跡とか、寒川で最初に考古学調査がおこなわれた天(応)神塚古墳とか、いろいろ発掘の成果がありますが、調査の時に作られる報告書はその遺跡に限定されたものですから、その成果を一度に集めた意義は大きかったのではないかと思います。



鳥養委員

残念なのは、さがみ縦貫道路の建設にともなう宮山中里遺跡です。平成十二（二〇〇〇）・十三年度の調査で、相模川に面した低地に七世紀初頭の前方後円墳がみつかった周期的な遺跡なのですが、これは考古編の刊行後の調査ということで、これまでの本編には盛り込まれていません。ですから、せめて今年度の「ダイジェスト」には活かしたいと思っています。

圭室　ありがとうございました。では古代・中世の鳥養先生。

鳥養　この仕事をお引受けするとき、じつはちょっと躊躇したんです。神奈川県は古代や中世の資料が非常に少ないからです。寒川神社にしても、相模国一宮ではありますが、実際にある資料はといえば、戦国期の棟札ぐらいです。結局引き受けてからも、どうやって最初の資料編をまとめようかと悩みました。

そこで考えついたのは、町民が過去の歴史のなかで何に対していちばん関心を強く持っているのかということです。そうすると、相模国一宮・寒川神社があるということ、梶原景時の館があるということ、このへんをメインにしていけばいいのかなと、見えてきました。

たとえば梶原景時は、あまりいい評価を受けていない人物ですから、彼のことを研究をしている人は少ないのが実情なんです。しかし館のある一之宮では、岡田富治先生を中心に顕彰会が組織されていて、景時を評価し直そうという動きが活発だったので、そのようなニーズにも応えるものを作ろうと思ったのです。

ところがいざはじめてみると、直接、一宮館について触れている資料はあまりありませんでした。『吾妻鏡』に何か所かでてくるだけです。だったら思い切って、景時の関連資料を集めてしまおう、景時資料集を作ってしまおうと、方向転換をしました。いろいろな方にも教えていただいた結果、逆に集まりすぎてしまったので、今度はなるべく相模国に引きつけて資料を絞りこむ作業にとりかかりました。こうして資料編ができあがったんです。ですから、今後の課題として、掲載できなかった資料のフォローが必要ですね。



大口委員

圭室　ありがとうございました。ではつぎに、近世の大口先生、お願いします。

大口　近世の寒川町域は、一一か村からなっています。自治体の単位としては非常に狭い方だと思います。そういう意味では、悉皆調査を実施して、古文書などの史料をかなり見ることができるだろうということでスタートしたわけです。幸い、昭和四十年代に神奈川県史が県内全域でおもな史料について目録をつくっていましたので、それを手がかりにすることもできました。

ただ、ここは城下町ではないし宿場でもない。言ってみれば、目玉がないんです。しかも、一一か村のほとんどが違う領主によって支配されているわけですね。ですから、史料はあっても、どういうふうに一つの地域としてまとめるか、なかなかイメージがわかなくて困ってしまいました。

そこで、目玉がないということを逆手にとって、一つは「殿様としての旗本」、つまり旗本というものをこの村から見たらいったいどうなるかという視点で考えました。幸い、旗本たちのなかには、教科書にもでてくる、大岡忠相（ただすけ）とか田沼意次（おきつぐ）とか有名な人もいましたので、そのへんからイメージをふくらませていきまして、宮山の領主である杉浦氏、これは八千石の旗本ですが、京都まで領地の関連資料の調査に行かせてもらったりして、まとめることができました。

もう一つは、寄場（よせば）が一之宮村に置かれたこと。江戸時代後期の関東農村は、旗本支配が多く、治安が不安定だったので、幕府は新たに組合村という形で治安維持の網をかけました。寄場はその中心村であるわけです。その関係資料がまとまって入沢章さんのところにあることに着目したのですが、それだけでは分量的にも一冊の資料集にまではなりませんでした。そこで、相模国内まで視点を広げて、既刊の自治体史などから寄場関係の法令などを探して網羅的に載せようと考えました。

これは町史としてはちょっと冒険だったかもしれませんけども、やはりやってよかったと思うのは、いろいろ反響があったんです。それ以後、各地でそういう研究が少し盛り上がってきたんではないかなと。この町史第三巻という資料集が、そういう流れに貢献できたのは成果だと思っています。

圭室　ありがとうございます。つぎは近・現代です。担当は山本先生と内海先生がいらっしゃいますが、まずは山本先生から。



山本委員

山本　丹羽邦男先生が平成六年に亡くなりまして、後任ということで児玉先生からお話があって、平成七年から編集委員として参加しました。この段階では、もう資料調査はほとんど終わっていまして、資料編の四巻と五巻ももう刊行されていました。ようするに、走っている列車に飛び乗ったみたいな感じでして、あとは通史編の刊行が差し迫っているというような状況でした。資料調査をしていなくて、いきなり通史を書くというのは、ちょっと荷が重かったんですけど、皆さんの協力もあってどうにかちゃんと作り上げることができました。また、いまは「統計編」の編集をすすめています。ですから、資料収集の状況については、内海さんに言っていただいた方がいいと思うんですけど。

圭室　じゃあ内海先生、お願いします。最初からご参加です。

内海　丹羽先生からお電話があったんですね。のっけから、この話は断らないでくれと（笑）。丹羽先生に連れられて、ここにはじめて来たのが寒川とのかかわりの第一歩だったわけです。何しろ相模線に乗るのもはじめてで、単線だということも知らなかったんですね。そういうわけで、まったくゼロからの出発でした。

でもそれは逆に、いま考えると、とても幸いだったかなという感じがします。大口先生が言われたように、まずじゃあ悉皆調査をしようということになったと思うんですが、とにかく寒川神社の名前しか知らなかった人間ですので、悉皆調査をすることによって、とにかく出てきた資料から寒川の歴史像を考えてみようということがまずありました。もちろん、ほかの市町村とくらべたり、いろいろな文献を見たりとか調べたりということもしましたが、出てきた資料のなかから考えていくという発想が基本でした。

その結果、どんなことがわかってきたかというと、まず、役場の公文書はそこそこにあるかなと。全部ではないんですが、まあまあるかなというのが第一の印象です。

それから二番目は、これがいちばん大きな成果だったんですが、自治会所蔵の資料が大量に出てきたということです。田端、大蔵、宮山など、それぞれに特色がある。とくに近代史の場



内海委員



近現代調査（相模海軍工廠女子挺身隊）

合、市町村史ではあまり扱ってこなかった資料だけに、これは大きな驚きであり、うれしい事態だったというふうに思います。

それからもう一つ、心がけたことは、町外の資料調査。これはたぶん近世や中世とも共通する部分かもしれませんけども。最初に手がけたのは相模線関係の調査です。分割民営化直前の国鉄本社へ行ったりしましたが、意外とあるようでなかったという印象です。

そのために、ひとつ方向転換を図ったんですね。それはどういうことかというと、高座郡という視点です。近隣の自治体史をみてみると、高座郡という単位で叙述することがあまりなかったということがわかったんです。そのために寒川の町史編さんではぜひ、その高座郡の視点というものをぜひ取り込んでみたいなというふうに思いました。資料編では、そのへんを活かすことができなかったんですが、通史編ではかなりそれを意識して書きました。それが成功したかどうかまだわかりませんが。このように、役場の文書と、自治会文書、それから高座郡。こういう見方をしていけば、これまでの自治体史とは違ったものが出てくるんではないかということがだんだんにわかってきて、そういう方向になるべく沿いながら、続けてきたわけです。

それから、あと二つ、心がけたことがあります。それは悉皆調査と並んで重視したのがインタビューです。近・現代ですので、実際に体験した人がご存命だったりすることがあります。その方たちに積極的に会って、インタビューを町史研究などに載せる。なるべくわれわれの評価を入れない形で、とにかく残せるものは活字として残していくということを心がけたわけです。これは、これからもまだ続けなければならないことです。たとえば、町役場のOB。戦後の寒川の発展を行政の立場から支えてきた人たちにお話を聞いておくことは大切なことです。まだそれは手がけておりませんけれど、なるべくインタビューをして、聞き書きを残していくことを心がけました。

それから、インタビューともかかわるんですが、内容が現段階では町民にとってマイナスなイメージでも、できるだけ資料として収集し、残せるものは残していきたいと。



小川委員

いまはマイナス的であるかもしれないけども、その記録が将来に役立って、結果としてプラスに転化するかもしれないということがありうるわけですから、きちんと記録化したい。このような考えかたで調査してきました。

圭章　ありがとうございました。では、つぎに民俗の小川先生、お願いします。

小川　さきほど山本先生が途中からとおっしゃいましたが、私はむしろおしまいの方からの参加ということになります。宮本袈裟雄先生からバトンタッチということで、平成十一年から編集委員に加わりました。ですから、準備段階の話などはよくわかりません。

ただ、宮本先生は皆さんご存知のように、あちこちでたくさん調査をされて、自治体史編さんの経験の豊富な方です。そうしたなかで努力されているのは、刊行したあと地元の人にどうやって読んでもらいやすくするかということで、研究者が好むような報告書に終始するようなスタイルは考えていなかったのではないかと思います。

「寒川町史」の民俗編の巻頭に宮本先生がお書きになったのを読んでも、それがよくわかります。

最初の調査のころは、私も宮本先生とずっと一緒に寒川を歩きました。そのころの経験などをもとに少し申し上げますと、一つは、別編「民俗」の刊行は平成三年と、非常に早い時期なんですね。ですから調査も非常に慌しかったという印象があります。でも、大字は一一ですからさほど広いわけでもないので、すべての地区で一回ずつ、一定の年齢以上のお年寄りに手紙を出し、集会所などに集まっていただいて、概要を調査しました。そのあとは地域やテーマを決めて、集中的に調査員が聞き書きをしていったのです。それで何とか刊行に間に合わせたというわけですが、逆にいうと、執筆しきれなかったことも残っているなという印象があります。

それからもう一つ。刊行が早いということで、あとから刊行された資料編などを見て、あらかじめこういう資料を確認することができたならば、



民俗調査

調査の仕方も書きかたも変わっていたのではないかと、悔やまれることがありました。民俗調査はお話しいただく方の記憶に頼る部分が大きくて、正確な年代が特定できないことがあります。それを記録資料でなるべく補っていくのですが、十分に資料をみることができなかったので、たとえば「若いころ」とか、漠然とした書きかたしかできなかった部分があります。

ところで、私たちは非常に多い人数で調査をしました。研究者のほかに、大学院生、大学生、そういう人たちが手分けをして、分野別にわかれていろいろやっていたので、たぶん宮本先生がいちばん苦労されたのは、たくさんの調査員の仕事をうまくまとめていく点だったのではないかと思います。そのなかでも、たとえば口承文芸とか、わらべうた、方言など、それぞれの分野の第一線で活躍している専門家に来ていただいて調査ができました。いろいろ特色を出そうとして工夫したあらわれだと思いますが、そんなふうにして民俗編ができあがったわけです。

圭室　ありがとうございました。さてつぎは、順番からすると美術工芸なのですが、ご承知のとおり、今年の一月、担当の佐藤昭夫先生がお亡くなりになりました。ご本人にこれまでのことを振り返っていただけないのは残念なんですが、私の感想を申し上げますと、寒川町史の美術工芸編は、ほかの自治体史とくらべて、格段にレベルが高いと私は思っております。

なぜかといいますと、佐藤先生は仏像でも何でも悉皆調査をなさるんですね。美術史をやっている人たちは、文化財的なものしか調査しない場合が多いんですよ。たとえば鎌倉時代以前の古い作品とか、新しくても国宝とか重要文化財になるクラスとか。ところが佐藤先生は、そのお寺やお宮に行きますと全部の仏像の裏側まで写真を撮りまして、そしてきちんと時代区分でこのころのものだとおっしゃるんですね。そういう成果を取り入れた自治体史というのは、そんなに多くないんじゃないかと思うんです。今回はスペースの都合で江戸時代以前の作品しか本編に載せることはできませんでしたが、明治以降のものも調査はちゃんとなさっています。

佐藤先生は「茅ヶ崎市史」の「考古・民俗編」のなかで「彫刻編」という章を担当なさいました。そのほかにも神



仏像調査（景観寺）

奈川県内の各地で、いま申し上げたような手法で調査なさってきました。それで編集委員になっていただいたわけです。先生のご専門は仏像ですが、絵画、工芸、建築、石造物など、それぞれの専門家に加わっていただき、グループで町内を回っていきました。その際、仏像以外のジャンルも悉皆調査をしています。この調査がきっかけで町指定重要文化財になったものもあります。そういう意味でも、いい仕事をお遣しになったと思っています。

以上で、ひととおりご発言いただいたと思いますが。

児玉　圭室さん、あなたのお仕事はどうでしたか。

圭室　そうですね。では宗教部門についてお話しします。本当にいい資料に恵まれたなという印象です。

まず、寒川神社の資料ですが、さきほど島養先生がおっしゃったように、中世以前は棟札ぐらいしかありませんし、近世文書も朱印状をはじめ四〇点ぐらいしかありません。ところが、明治以降の資料は大変よく残っているんです。日記、庶務関係・祭礼関係・建築関係の書類、祝詞（のりと）などさまざまでして、とくに「寒川神社日記」とか「浜降祭日記」は調査



圭室委員



高野山高室院での資料調査

報告書にその一部を紹介することができました。

それからもう一つは、町外で資料調査をたくさんやらせていただいたのが、大きな財産になったと思います。とりわけ、高野山高室院（こうやさんこうしついん）文書の調査は大きな成果でした。中世末から明治初期にかけての高野山信仰の実態がわかる資料群です。神奈川県内からでもこれほど多くの人たちが高野山にお参りに行っているなんて、正直いって考えてもみませんでした。しかも、ほとんどの人に苗字が記されている。江戸時代の庶民の苗字は公式に名乗れなかっただけで、じつはみんな持っているんだということが証明できたわけですから、これは驚きでしたし、大変勉強になりました。

その他にもいろんなところに行かせていただきました。伊勢神宮にも調査に行きましたし、永平寺、比叡山、羽黒山、金刀比羅（ことひら）さんにも行きました。私がいちばん事務局に負担をおかけしたのかなと思っておりますけども、それぞ

れのところで寒川に関するいい資料を拝見することができました。これらの資料のほとんどは写真に撮ってございますので、これから寒川の文書館ができれば、ぜひそういうところで活用していただきたいと思います。そのような資料がかなり収集できたと思っております。

三　今後の刊行物

圭室　さて、町史本編の刊行は今年度で終了することは最初に申し上げましたが、町史研究、調査報告書、資料所在目録、新聞記事目録といった、四種類の刊行物については、今後も継続していく方向で、事務局としては検討をしてくださっています。そこで、やり残したことと申しますか、今後の刊行物としてどのようなものを作っていったらいいのか、そのあたりをお話しください。

木村　では、私から。先ほども述べましたけれど、刊行年度の後先ということで宮山中里遺跡などの成果が本編に載せられませんでした。発掘調査は毎年どこかしらでやっていますから、新しいすばらしい成果がどんどんでてくるはずです。これらを評価してまとめなおす作業はいずれ必要になります。町史研究や報告書の誌面を使って、このようなことができるといいですね。

圭室　島崎先生はいかがですか。

島崎　私もさきほど少し申し上げましたが、梶原景時の関係資料は、直接、一宮館にかかわるものはあまりないものの、そうでないものは予想以上にたくさんあることがわかりました。また、梶原氏に関する系図もいろいろあることがわかってきました。これらをまとめなおす作業はぜひやってみたいと思います。

大口　近世では、悉皆調査の結果、近代と合わせれば数万点の資料がでてきました。これらのほとんどはマイクロフィルムに撮って、写真版を製本してあります。将来的には文書館でこれを閲覧に供するのでしょうが、遠くの研究者などはそういつでも見に来られるわけではありません。そこで、古文書の写真を載せて、読み下しや解説を施すような、そんな報告書も可能なのではないかなと思っています。

圭室　いまおっしゃった写真版の古文書集というのは、どんなふうにして載せるのでしょうか。

大口　いや、そこのところはまだ詰めて考えてはいないんですが、旗本とか、年貢とか、あるテーマごとに古文書を選んで、写真を見てもらうようなことではどうかと思うんです。何々家文書といった所蔵者別に載せるだけだと、ちょっとやっぱりとっつきにくいということで。

あと、資料所在目録の枠で、御用留の明細目録を作るとか、せっかくある資料ですから、使ってもらうことをいろいろ考えていきたいです。

小川　私たちの民俗調査は、昭和六十一年からはじめて、平成三年には本に仕上げてしまいました。昭和初期からの古文書などに記録されない暮らしの変化をどう書き残していくかということをテーマにやってきたのですが、その調査からもう十年以上がたっています。その間も寒川の人たちの生活は急速に大きな変化をしているはずです。そういう変化を、どこかで何らかのかたちで書き残さなければいけないのかなと思っています。

それと、実際に使ってきた道具、あるいは大きいものでは家屋そのもの、そういった物質文化についての調査がほんの断片的にしかできませんでした。昔の農具や生活道具など、気がついたら、話では知っているけれど物は実際にはない、なんていう状態になる恐れがあります。せめて写真とか、あるいは動きのあるものはビデオに撮るとか、そういうことをしておかないと、なかなか後世に伝わらないのではないでしょうか。どうやって調査をし、どうやってまとめるか、難しい面もあるかもしれませんが、まだ継続して調査をおこなう必要があると思います。

児玉　圭室さんのところはどうですか。

圭室　はい、すでに調査報告書で、「寒川神社日記」や「浜降祭日記」を刊行したことは先ほど申し上げましたが、じつは明治六年から昭和三十年までずっと書きつづられている日記七一点のうち、いまのところ六点しか活字にできていないんです。たとえば藤沢市文書館では、遊行寺の日記である「藤沢山日鑑」という資料を活字化する作業を二〇年間も続けていまして、さらにまだ続くようです。これみたいに、寒川でも、何年かかるかわかりませんが、寒川神社日記の残りを刊行していく作業をずっと続けていくことができればと思っています。

四　資料の保存と活用に向けて

圭室　ではつぎに、今後の資料の保存と活用のありかたについて話題を移したいと思います。

すでに平成十年八月、「寒川町の資料保存と活用について」というテーマで編集委員会の座談会を開きまして、『町史研究』第一二号に掲載されました。これがきっかけとなって翌年、町史編さん審議会では「町史編さん資料の保存・活用に関する要望書」を作成し、町長に提出しています。

こうした一連の動きが多少は影響したのではないかと思うのですが、新しい総合計画のなかに、文書館建設検討事業が位置づけられました。当初は二〇年近い総合計画のお

しまいの方に置かれていたのですが、これが総合図書館の建設計画と一体で検討することになってきたようです。つまり、計画が前倒しになったわけで、文書館の姿がおぼろげながら見えてきたという状況です。山田町長の英断に感謝したいと思っていますが、審議会ではさらに「文書館の業務に関する提言書」というのをいま検討しつつありまして、文書館をつくるならこんな文書館にしてほしい、という希望をまとめる予定です。

そんな状況を踏まえて、今後の資料の保存や活用はどうするべきか、いろいろご意見をお聞かせいただければと思います。山本先生、何かございませんか。

山本　そうですね。編集した自治体史の刊行物って、どこの場合でもなかなか市民や町民の手元には渡らなくて、かなり在庫を抱えてしまうんですよね。ところが、私はいままで五か所ぐらい自治体史にかかわっていますが、そのなかでは南足柄市の場合、わりと市民の皆さんが部屋に市史を買いに来るんですよ。予約も多かったようですし。そういう意味ではうまくいっているようなんです。それはどうしてかというと、編さん事業の進行中に歴史講座というようなものを何回もやっているんです。それで市民の皆さんが刊行物の内容に興味を持ってくれたんではないかと思うんですね。

寒川の場合、これまであまり講座関係が多くなかったように思うんですけど、やっぱり地元に還元するという意味では、そういう町民講座のようなものを、あまり大規模でなくてもいいと思うんですが、気軽に参加していただけるような形で考えていただいたらいいんじゃないかなと思いますね。私も一度、粗模様の展示をやったときに、関連のお話をしたことがあるんですが。そのときは年配の人が多かったけれど、かなりの人数が集まりましたし、みなさん熱心に聞いてくれました。

そういう催しをもっとやれば、町の歴史にみなさんが興味を持ってくれると思います。資料そのものの活用も大事ですが、まずは歴史に接する機会を作らなきゃいけないと思うんですね。

圭室　ありがとうございました。文化財学習センターの展示にともなう講演は、だいたい年に一回ぐらいやっているんですが、町史の刊行物に添った講座もやはり必要ですね。ほかにどなたかございませんか。

鷹養　寒川のこれからつくる文書館は、図書館と同じ建物のなかでやっていくと伺いました。前の座談会でも申し上げたかも知れませんが、神奈川県の場合、県史編さん事業が終ったあとの資料をどう保存・活用していくかということが問題になって、私たちは神奈川地域史研究会をつ

くって運動を進めてきました。その結果、とりあえずできたのは昭和四十七年の文化資料館なのですが、これは県立図書館に併置された施設でした。それではいろいろ制約があるということで、こんどは知事部局に移すよう要望してきました。それでようやく平成五年にできたのが、二俣川にある神奈川県立公文書館です。

寒川の場合、県と同じ轍を踏まないように、どうせつくるなら、はじめから動きやすい組織をつくっていただきたいと思います。

圭室　ありがとうございます。木村先生は何かございますか。地元代表ということで。

木村　私としては考古遺物を整理・保存し活用する、そういうことをちゃんとやらなければと思っているのですが。いまは文化財学習センターで、細々と整理作業を進めていますが、収蔵スペースも狭いし、展示とか講座とかといった活用もあまり積極的にはできていないのが実情です。だから、ちゃんとした資料館が必要だと、いろいろな会合で町長や助役、あるいは教育長にお会いするたびに言っているんですが、なかなか難しいです。

古文書や公文書などは文書館という形で実を結びそうなので、それはそれで喜ばしいのですが、資料館ではないので、何ともいいようがないです。

圭室　ありがとうございました。残念ながらあまり時間が残されていません。最後に一言、児玉先生にまとめをお願いしたいと思います。

児玉　寒川町では大変ていねいに町史編さん事業を推進することができました。本の作りかただけでなく、その基礎となる資料の収集についてもちゃんとやってきたという印象です。だからこそ、本編が終わるからといって、ここで事業が切れてしまってはいけない。この資料をどう保存していくかということが大事で、しっかり保存していればいろいろ活用ができると思います。町民の皆さんに資料を実際に見てもらうこともできますし、報告書などの刊行も続けていくことができるんです。何十年後か、将来また新たに編さん事業をおこなうなら、そのときにも役立つようにしておいていただきたい。文書館はそれを実現する場だと思うわけです。

そういう町の考えかたは、早いうちに町民の皆さんにも伝えておいたほうがいいですね。資料を散逸させないよう協力を呼びかけたり、もし手放したいというようなことがあれば、これは町に寄贈や寄託を相談する方法があると周知したりして、この町の資料は少なくとも町外に出ないような方法を考えていただきたいです。

圭室　ありがとうございました。いま、児玉先生からご

指摘がございましたように、編さん事業についてはこれからも継続していくということ。そのベースになるのが資料保存の機関であること。こうまとめていただいたと思います。

これまで一七年かかって貴重で、豊富な資料を収集してきましたが、これらを町民の共有財産として保存、活用していく場が文書館なのです。今日の座談会で、先生方のご発言にありましたように、これまでの仕事を継続させていくわけですから、それをふまえた組織作りをぜひお願いしたいと思います。

どうも、今日は長時間ありがとうございました。

（平成十四年七月二十九日、議会第一委員会室にて実施）

組織と事業の記録

（1）町史編さんの組織と人員
[1] 編さん事業前史
[2] 編さん事業の準備
[3] 町史編さん基本構想
[4] 町史編さん審議会
[5] 町史編集委員
[6] 町史編集協力員
[7] 事務局
（2）事業の推進
[1] 資料収集の状況
[2] 刊行物の概要
[3] 保存の方策
[4] 展示と普及事業
[5] 事業費

（1）町史編さんの組織と人員

[1] 編さん事業前史

寒川町が歴史に関する本を発行したのは、今回の編さん事業が最初ではない。

昭和二十五年（一九五〇）、町制施行一〇周年を記念して、『郷土史話さむかわ』が刊行された。A5判九八ページで、全編が加藤丘之助の執筆による。加藤は、寒川、御所見（藤沢市）など各地で教鞭をとったのち、昭和二十一年から二十四年まで、寒川国民学校・寒川小学校の校長を務めた。そのかたわら、詩の創作や郷土史研究など文化活動にも尽力しており、この本を執筆した当時は寒川町公民館長であった。街道、神社、塚、梶原景時など、寒川の史跡や歴史的事柄を、私見をまじえながら紹介するという内容である。

昭和四十三年には、「明治百年」の記念事業として、こ

寒川文書館 開館記念誌



寒　川　町

座談会「町史編さん事業から文書館へ」

[出席者] 町史編集委員長　圭室文雄（司会）
委員（考古担当）　木村　勇
委員（古代・中世担当）　鳥養直樹
委員（近世担当）　大口勇次郎
委員（近現代担当）　内海　孝

1　町史編さん事業の成果と課題

司会（圭室）　皆さん、本日はお忙しいところお集まりくださいまして、ありがとうございます。これから座談会を始めたいと思います。本来ならば長年にわたりご指導いただいた児玉幸多先生にもご出席いただき、お話を伺いたかったのですが、ご都合が悪く欠席なさいましたので、私が代理で進行役をつとめます。

今年の秋、待望の寒川文書館がオープンすることになりました。ここに至るまでには、町史編さん事業の成果がベースにあったと言って良いと思います。皆様方には、そのための資料調査、研究や編集の過程においてさまざまなかたちでご尽力いただきました。その結果が寒川文書館というかたちに実を結ぶのは大変喜ばしいことだと思います。

そこで今日は、「町史編さん事業から文書館へ」と題しまして、（1）編さん事業の成果、（2）資料保存の課題、（3）文書館に期待すること、といった流れで、それぞれお考えをお聞かせいただければと思っております。

ではまず編さん事業の成果について、考古担当の木村さんからお願いします。

木村　『寒川町史』の考古編が刊行されたのは、平成8年のことでした。また、その後刊行された通史や図録、ダイジェストなども含めて、それまでの町内で発掘調査された遺跡や遺物などについて紹介してまいりました。

おかげさまで高い評価をいただいているようです。先日も九州国立博物館へ行きまして、地元の先生とお話しする機会があったのですが、寒川町史を読ませてもらいましたがすばらしいですね、などといわれまして、やった甲斐があったなと思っています。

圭室　町史がでたあとにも、発掘調査はどんどん行われていますね。このあたりのフォローはいかがですか。

木村　これまで載せたデータというのは、ほとんどが開発にともなう調査の成果をまとめたものです。

おっしゃるとおりこうした調査は、町史の刊行後もつぎつぎと行われていまして、たとえば最近で大きな成果があったのは、さがみ縦貫道路の建設工事にともなう宮山中里遺跡です。相模川の堤防沿いに前方後円墳がみつかるなんて、私なんか夢にも思わなかったのですが、ほかの遺跡でもいろいろな発見がありました。ただ最近は、私などが直接現場へ行ってもなかなか見せてもらえなくなりましたね。危ないですから、その辺でとまってくださいとか言われて。


木村委員

圭室　さがみ縦貫道路の調査は国がやっていたのですか。

木村　道路の建設は国の事業ですけれども、発掘調査はかながわ考古学財団でやったものです。

幸い、現場には行かなくても、町の教育委員会の主催で、発掘調査の責任者の方が報告する発掘調査発表会が開かれますので、そこで複数の遺跡の調査の成果をいっぺんに知ることができます。しかしそこに来なければ、一般の人が遺跡について詳しく知る機会って案外ないんです。調査している土地の地主さんでさえ、「木村さん、あそこは何が出るんだよ」なんて尋ねてくるほどですから、どうもＰＲが足りないと思います。それが非常に残念に思います。町としてすべきなのか、開発の事業主がすべきなのか、いろいろ考え方があるでしょうが、いずれにせよ、どこでどんな調査が行われ、どんな成果があったのか、広く地域の人に知ってもらうことが必要だと思います。

圭室　それでは、次に古代・中世の鳥養さん。

鳥養　私は古代・中世を担当しましたが、このうち古代につきましては、寒川町に直接関連するということになると、寒川神社のことが国の史書などに少しでてくるくらいなんですね。もちろんこれも大事なんだけれども、それだけではなかなかこの地域の古代社会をわかってもらうことはできないと思いまして、大和市史に携わったときもそうだったんですが、高座郡全体の歴史をまとめたような形で書いたわけです。

いま木村さんが最近の発掘成果のことをおっしゃったんですが、ここ数年、相模川の両岸、平塚や茅ヶ崎、寒川のあたりからは、すばらしい成果がでているんです。特にこの近くで言うと、茅ヶ崎北陵高校の敷地から、高座（高倉）郡衙の跡と考えられる遺跡が出てきています。さらにその周辺からも古代寺院の遺構が出てきている。

私は考古学の専門ではないので、成果を利用させてもらうだけですが、高座郡の古代史もずいぶん書き換えなければいけなくなるかもしれませんね。

次に中世のほうですが、南北朝・室町時代は中元孝二さん、戦国時代は下山治久さんの協力を得てまとめることができました。

寒川の中世を考えると、梶原景時という人物を絶対に忘れてはいけませんから、資料編では景時に関連する史料をなるべくたくさん載せるよう心がけました。

しかしさらに調べてみると、景時のみならず、その一族や子孫に関する史料も意外と


鳥養委員

多いことがわかりました。中元さんとはよく話をするんですが、資料編を刊行したあとに、いろいろな研究者によって、これまで知られていなかった史料が紹介されることも結構あったりします。ですから将来的には、「梶原遺文」とでもいうんでしょうか、梶原一族に関する史料を網羅的に収める資料集をつくることができればいいなと思っています。

『寒川町史』第１巻の資料編をつくったとき、中世史のある有名な先生に、梶原の史料をこれだけ集めたのは初めてだと言われたんです。めったに人を褒めることのない人ですから、「集めたことはいいことだ」なんていう言い回しでしたが（笑）、このとき実にやって良かったなと思いました。予算が許すならば、その後に所在のわかった史料や、南北朝・室町期の史料も含めて、中元さんらの手を借りて「梶原遺文」をぜひ手がけたいなと思います。

圭室　ありがとうございました。次は近世です。大口さん、お願いします。

大口　近世つまり江戸時代については、地方文書（じかたもんじょ）といいまして、地元に村方の史料がたくさん残っているわけです。寒川町史では、悉皆調査、すなわち町内に残っている限りの古文書を集めようという計画をたてました。これは近代の史料と一緒におこなったのですが、町民のみなさんにご協力いただいて、情報のある限り資料を出してもらって、それを整理したのち写真に撮って残すという作業を行いました。これは町民にとって相当貴重な財産だと思います。

ただ、悉皆調査といいましても、どうしても洩れがあります。土蔵を壊したとか、代替わりをしたとか、そういうことによって新しい史料が見つかることがしばしばありまして、現に町史編さん担当に情報が寄せられることがあります。そういうもののフォローを継続的に行う必要があると思います。

こうやって集めた資料をもとに、資料編や通史をまとめていきました。江戸時代の寒川の特徴は何かと考えると、宿場町でもないし、城下町でもないから、柱が建てにくかったのですが、たくさんの旗本がおさめている地域であるとか、相模川の周辺の村ということなどをクローズアップして江戸時代のイメージをつくりました。その中で、ひとつの目玉だったのが、寄場組合村です。寄場が一之宮にあったということをもとにして、この地域の組合村については当然のことながら、これまであまり実態が明らかでなかった関東取締出役に関する資料を、この地域だけでなくて、相模国、武蔵国ぐらいまで広げて、よその自治体史からも拾い出して、それを１冊の資料集にしました。これは、寒川町史のひとつの特徴だと思うんです。

それをやってかれこれ10年ぐらい経ちましたでしょうか。この『寒川町史』第３巻の刊行がひとつのきっかけになって、関東の各地で、それだったらうちもこういう資料が


大口委員

あると、自治体史等の刊行物が出たり、研究会が生まれたりするようになりました。せっかく我々が手をつけたことですから、新たな資料調査まではいかないにしても、各地の自治体史の刊行した史料データを蓄積する情報センター的な役割を、今までの町史編さん事業からの延長として、文書館として今後やっていくべきことではないかと思いました。

それから、古文書の悉皆調査のあと、整理や撮影が済むと、資料は原則として所蔵者にお返ししていました。しかし、それぞれのお宅で現物の古文書を管理していくのはとても大変なことです。文書館にはちゃんと保存に適した書庫ができるのですから、寄贈や寄託をしていただくこともきちんと考えなければいけないことではないかと思います。

圭室　ありがとうございました。それでは、近代の内海さん、いかがでしょうか。お願いします。

内海　はい。いま大口さんがおっしゃったように、近世と合同で町内の悉皆調査をやりました。その結果、近世以上に近・現代のそれまで知られていなかった資料がみつかったのは、とても大きな成果だったと思います。もうひとつ大きな特徴は、聞き書き調査の成果です。民俗調査とはちょっと違った形なんですが、相模川の砂利のこととか相模海軍工廠のこととか、記録資料があまり残っていない部分を聞き書きで補充する調査ができたということが大きな特徴だろうと思っています。

ただ、悉皆調査をしたおかげで、本来あったはずの資料がすでに失われてしまったことがわかって、逆に失望感をもたらしたともいえるんですが、だからといって、まだあきらめているわけでもありません。

たとえば、倉見の大地主に真田家と五島家というのがありましたが、特に五島家の場合は、資料がまだ完全に把握できていなくて、課題として大きく残っています。真田家については、資料の整理はさせてもらいましたが、その分析はまだ必ずしも十分ではありませんので、この点も課題として残されています。

それから、近代の寒川を考える際、明治36年から大正８年までの北野与吉村長の時代がとても重要だったと私はとらえているのですが、肝心の北野家にあまり資料が残されていないようです。ただこれも、まだ必ずしも望みを捨てたわけじゃないので、今後に関連する資料がみつかることを期待しております。

ところで、近代史を考えるに、日本では自由民権運動というのが大きな核になるのですが、寒川地域の場合、その関係資料がほとんど出てきませんでした。これがどうしてなのかを考えることも、大きな課題だと思っています。

つぎに、先ほどちょっと述べたように、相模海軍工廠について聞き書きで従来不明だっ


内海委員

た部分のフォローができたのは大きな成果だったのですが、これについての記録資料は、占領時期のアメリカ軍の押収文書の中に含まれている可能性もあって、まだ調査の余地はあるものと認識しています。

さらには戦後の大きな問題として農地改革がありますが、この資料も意外と少なかったと思います。真田家文書に少し残っていて、それをもとに山本弘文先生が通史にまとめられましたが、資料が出てくればもっと掘り下げたい。これも今後の課題に挙げておきたいと思います。

そんなわけで、近・現代の場合は、資料の調査はかなり精力的に近世と共同で行ってきたわけですが、どうにも駆け足でおこなったままだったので、どうにか全体像は少し見えたんですが、詳細な調査と追究についてはまだまだ途中である、そんな感じを持っています。

圭室　ありがとうございました。

鳥養　圭室さん、宗教部門はどうでしたか。

圭室　本編でいうと、「神社編」と「寺院編」の２冊をまとめることができました。「神社編」は寒川神社と各地区のいわゆる鎮守のお宮について、いろいろな角度から紹介したものです。また「寺院編」は、町内のお寺の由緒などに加え、伊勢参りや高野山や出羽三山などへの参詣といった遠隔地信仰にかかわる資料もまとめました。

このうち寒川神社の資料は、神奈川県史のときも茅ヶ崎市史のときも私が関わらせていただいたんですが、そのときは調査の協力をお願いしたものの、ほんの少ししか見せてもらうことができなくて、資料の全体像がどうもつかめませんでした。しかし今回は町がちゃんとやるのだからと、当時の藤沢町長のお口添えもありまして、全面的に協力をしていただきました。

その結果、すべての資料をマイクロフィルム化することができました。さらに資料所在目録を刊行し、神社編などに活用させていただいたほか、調査報告書として、いまのところ「寒川神社日記」と「浜降祭日記」を２冊ずつ翻刻することができました。ただ「寒川神社日記」は明治６年から昭和29年までそろっているうち、まだ明治14年までしか活字にできていませんし、「浜降祭日記」もおもに明治期と大正期の分はまとめましたが、昭和５年以降の活字化はまだ手がついていません。寒川文書館の仕事として、この続きはぜひ手がけていきたいと思います。

「寺院編」で扱った遠隔地信仰というのは、遠くの寺社へお参りに出かけたり、先方の宗教者がお札配りにやってきたりということです。江戸時代の人にとって、住んでいる村を離れて伊勢参りなど遠くに出かけるなんて、一生のうちそう何度もあることではありませんが、自分たちが書いた「道中日記」のほか、各寺社に残された宿泊や近親者の菩

提供養の記録が、旅の証しとして、また江戸時代の人たちの宗教活動の記録として、とても大事なものです。私たちは、伊勢神宮、高野山、金比羅さん、榛名神社、出羽三山のうち羽黒山などへ出かけ、寒川町をはじめ相模国の人々の動向がわかる資料を調査し、マイクロフィルムに収めてきました。


圭室委員

特に高野山高室院文書の場合は、高野聖がどのようにして檀家を獲得してお札を配って歩いたかとか、相模国の人たちがどのようにして高野山へお参りに出かけたとか、そういった信仰の実態が明らかになる、すばらしい資料でした。さらに、江戸時代の庶民の大部分が苗字を持っていたこととか、「庄」とか「郷」などといった中世的な地名が17世紀後半まで使われていたことなど、いろいろなことがこの資料からわかってきました。とはいえ、詳細な分析はまだ緒についたばかりですから、これからも継続しててがけていきたいと思っています。

2　資料の保存・活用の課題

圭室　町史編さん事業で得られた成果とか今後の課題とかについて、ひととおりお話しいただきました。では次に、集まった資料をどのように保存したり活用したりすればいいかという問題について考えていきましょう。まずは木村さんから。

木村　考古資料で活用ということになると、まっ先に思いつくのは展示です。しかし、図書館と文書館において十分な展示ができるかというと、残念ながらノーといわざるをえません。

現在は一之宮小学校の中にある文化財学習センターで遺物の保存をし、一部は展示もしています。しかし、センターの存在そのものを知らない町民もかなりいますし、昨今は学校の敷地内に部外者を入れること自体、学校が過敏になっていますね。「ああ、きょうは何もなくてよかった」というのが校長先生の本音らしいですから、センターのＰＲの看板もちゃんと建てられないようです。センターの中では遺物の整理や復元作業などこつこつとやっているのですが、なかなか町民の目にふれる機会は多くありません。


文化財学習センターの考古遺物展示

図書館と文書館なら、人が必ず集まりますし、学校に気兼ねしなくても良いのですから、場所としてはうってつけだと思います。特に文書館なら展示コーナーが設けら

れますしね。しかしこの場所は、本来は記録資料の展示をするスペースですから、考古資料の展示を常設するわけにはいかないようです。

圭室　たとえば藤沢市ですと、博物館準備担当というセクションが資料の調査や収集をしていますが、常設の展示施設がないものですから、期間を決めて駅ビルの６階にある市民ギャラリーで企画展示を開催しています。常設でないならば、そのような方法はいろいろ検討できるのではないでしょうか。

木村　そうですね。新しい図書館のなかに、たとえ１坪でもいいですからガラスのケースを入れて、年に１度でいいから、展示替えをして、いろいろな遺物を見てもらいたいと思います。こういう資料も出ています、ああいうのも出ていますと紹介すれば、なるほど寒川ではこんなにいいものが出てくるのかというようなことを知っていただけますね。これが一番大事だと思います。現在はしまいっぱなしで、宝の持ち腐れみたいなものですからね。

圭室　この建物は図書館と文書館の複合施設ですが、さらに博物館的な機能を付加させようということですか。

木村　そうです。本来は単独の博物館が必要だと思っているのですが、急に大きな施設をお願いしても無理な話ですから、図書館・文書館の中で、たとえ１坪でもいいから展示ケースを常設してもらいたいと思ったのです。しかし、もう図書館・文書館の建設自体ができあがりつつあるこの時点で、専用のスペースを設けるようお願いしてもちょっと難しそうですから、圭室さんがおっしゃった藤沢市の例などを参考に、当面は企画展示をやっていく方向なのかなと思います。何しろ考古遺物は町の大事な宝なのですから、何らかの形で皆さんに見ていただくことが必要だと私は思います。

圭室　幸い、図書館にも文書館にもある程度まとまった展示スペースがあるようです。こちらを有効活用した方が、１坪の常設スペースより、メッセージが伝えやすいのではないでしょうか。第一段階としては。そして次のステップとして将来は別に博物館を、という流れになればと思います。

では次に中世、鳥養さんお願いします。

鳥養　古代・中世の場合には保存よりも活用という感じですね。ご承知のように寒川には、現地に残された古代や中世の古文書がほとんどないからです。

神奈川県史というすばらしい事業がかつてありました。古代・中世は竹内理三先生を中心にやられたんですけれども、その資料編について、先生はこうおっしゃいました。研究者がこれを見て原文書に迫るような一種の事典的な役割をするものだと。この言葉がすごく印象に残っているのですけれども、しかし、寒川町史の場合には、研究者だけを対象にしたものではないし、そういうものであってはならないと思っています。

大学の史学科を出てある程度のトレーニングを受けている方は、まず手にとってそれをある程度読み取ることができるだろうと思います。そうではない方々に対して、たとえば梶原なら梶原に興味を持っているんだけれども、一般的な梶原景時についてのいろいろな

著作は読んでみたけれど、実際のところはどうなんだろうと、史料を見て自分で考えることにチャレンジする人が出てくるかもしれない。そんなときに、資料集を読み取るお手伝いが少しでもできるような、そういう活用の場をもっと広げることが必要なのかなと思っています。

実は神奈川県史の時にそういう勉強会を立ちあげたことがあるんです。ちょっと途中で頓挫してしまったんですけれども。まだ私ももうちょっと若いころ、鈴木靖民さんとか大平聡さんとか、そういう世代の人たちが集まりまして、神奈川県史を改めて勉強しようという目的である会をつくりました。そこには研究者ばかりでなく、一般の市民の方も参加していただきました。

史料を通じて歴史を見ていく、そういう一番大事なところをどこかでやる必要があると常々思っていますので、寒川でもぜひそういう場を設けることができればと思います。中世史を学ぶいろいろな方を講師に招いて、改めて史料をこんなふうに見たらいいのか、なんてことをどんどんやってもらえたらいいなと思います。

圭室　ありがとうございました。次は、大口さん、お願いします。

大口　先ほども申しましたけれども、近世では近現代部門と一緒に悉皆調査をして、その資料を写真版として手元に残すことができました。ここまではほぼ理想的な形で仕事をすることができたのではないかと思っています。それを使って刊行物を編集してきたわけですが、実際に資料集等に載せることができたのはおそらく１割に達していません。せっかく所蔵者の方が提供してくださった資料ですけれども、実は十分には使いこなしていないと思うんです。

そこで今後、文書館においてそれをどう利用、活用するかというのが大きな課題になるわけです。へたをすると死蔵に終わってしまうかもしれないのです。

近世史を志そうとすれば、かつては卒業論文にしても何にしても、地方文書を見なければはじまりませんでした。ところが最近はどこの大学でも、地方文書からこつこつと卒業論文を書こうという学生は減ってしまい、国文学研究資料館など資料の保存活用施設でも、昔に比べると若い人はあまり見に来ないというのが実情のようです。それは活字化された資料が増えてきたとか、農村以外のいろいろなテーマができるようになったとか、いろいろな要因があると思いますが、いずれにせよ、寒川文書館の場合は、専門家だけを相手にしていたのでは、年間に何人かしか資料を見に来ない、そんな恐れだってあるわけです。

ですから、いま鳥養さんのお話にもありましたように、もっとすそ野を広げる必要があると思います。古文書を読む会とか、あるいは研究会といったグループ、サークルがこの地域で広がっていき、それが将来の町史の書きかえにまでつながっていけば、とても意味のあることじゃないかと思うわけです。

たまたまこの４月、「茅ヶ崎歴史散歩の会」というサークルに頼まれて、大岡忠相のことについて講演する機会がありました。昨年の町史講座で「大岡忠相と田沼意次」という

テーマのお話をしましたが、そのときにこのサークルの方が聞きに来られていて、ぜひうちのメンバーにも聞かせてほしいという要望があったのだそうです。4月の講演に集まったのは40人から50人ぐらいでしょうか。終了後の懇親会まで行って皆さんのお話をうかがったところ、茅ヶ崎市民だけでなく、メンバーの3分の1ぐらいは寒川の人だっていうんです。これはちょっとびっくりしましたね。

このサークルは散歩の会ですから、古文書を読むのとは違うけれども、地域には潜在的に歴史に興味を持っている人たちがかなりいると思うんです。これまでは歴史の編さん、出版ということに仕事の主眼を置いていましたが、せっかく資料が集まってきたのですから、組織をうまく作って、資料に興味のある人のすそ野を広げていくことを意識的にやる必要があるんじゃないかなと思いました。

圭室　では近現代、内海さんはいかがですか。

内海　いまお2人の先生から、すそ野を広げるというご指摘がありました。大賛成ですが、講座や研究会とちがう角度から提案するとすれば、文書館を支える「ボランティアの会」のようなものを組織するのがいいのかなと思っています。

確かに専門職員が資料の収集、保存、レファレンスなどを実践し、その指導のもとで研究会が開かれて一般町民にまで“町史研究”のすそ野が広がるという流れは、それはそれでいいんだけれども、それだけはできない、さまざまな切り口で文書館を起点にして何かやっていこうというような、文書館をうまく利用した、いわば文書館と町民との相互依存的な輪みたいなものができていけばいいなと思っています。

さきほど大口さんがおっしゃったように、近世や近現代の資料はまだあまり刊行物には活用されていません。ということは、まだまだ活用される可能性をいっぱい秘めているということなのです。僕たちがやった資料編や通史編などの刊行物は、ほんの通過点にすぎないという感じがいたします。さまざまな切り口から、さまざまな人が自分の興味から入っていけば、文書館の資料群は死蔵どころかまだまだ宝庫だと考えていいと思います。

従来だったら、たとえば藤沢市文書館に行かなきゃいけないとか、あるいは神奈川県立公文書館に行かなきゃいけないとか、ちょっと足をのばさなければ資料を閲覧することはできなかったのですが、これからはちょっと自転車でやってきて、気軽に身近な資料を見に来ることができるようになったのはすごく大きいと思います。

でもそれを職員だけでなくボランティアや研究会のメンバーと一体となって、興味や疑問を持った人を支える体制づくりが必要だろうと思います。

圭室　ボランティアの話がでましたが、このところどこの街に行っても、ボランティアの人たちが博物館とか資料館とか、あるいは街角の史跡とかを案内してくれますね。寒川でもそういう組織を作ろうという準備の動きがあるようですが、そのグループと文書館との連携はぜひ必要だと思います。

郷土に関心があって、郷土の歴史を学んでいこうという人たちのパワーは、かなりすごいものがありますね。私も最近、大学の公開講座で「熊野古道を歩く」という企画があって講師として行ったのですが、実に詳しい人が何人も参加していて、いろいろ説明してくれるんで、講師の出る幕がないくらいでした。おかげで暇でしたが（笑）。

ただ、古文書の会にしても、研究会のようなものを組織したら、その運営にはちょっと気を遣わなければいけません。ある市の例でいいますと、古文書の会を週に1回か隔週で1回ぐらいで開いていますが、メンバーが固定されてきてしまうので、新たに勉強してみようという人がいてもなかなか入りにくくなってしまっているようです。固定された人たちは3年も5年もやっているとかなり実力がついてきて、近世文書の史料集の翻刻を手伝っているんですが、そういうセミプロ集団にみたいになってしまうと、ますます新しい人が入りにくくなってしまう。それにその人たちが研究会をやる日は閲覧室のかなりの席数をふさいでしまうという問題もあるようです。そのへんの調整が必要でしょうね。

内海　観光協会など既存の組織とのタイアップも視野にいれたらどうかと思うんです。いろんなイベントを打つにしても、文書館の資料による歴史的あるいは資料的な裏付けにもとづいて企画した方がいいわけだし、さまざまな切り口のボランティアが生まれる可能性もある。それをさらなるネットワークにつなげることだってできるのですから。

たとえば、郷土の料理を食べようなんて企画だっていいわけです。季節ごとに地域のお年寄りが食事を作って実際にみんなで食べようとか。そんなことでも、地域の歴史や文化を知るということにつながるわけですし、それを支えるボランティアが欠かせないと思いますね。

3　文書館への期待

圭室　では最後に、文書館に期待することとか、活動のあり方についての提言などがありましたら、どんどん挙げていただければと思います。資料の保存のこととか、利用のこととか、普及事業のことなど、これから文書館がどういうことをやっていったらいいんだろうということについて、いろいろアイデアをお聞かせいただきたいと思います。もうすでにボランティアの話などがでましたが、ほかにございましたら、どなたからでもご発言ください。

鳥養　先月、神奈川地域史研究会の大会がありまして、そのときに行われたシンポジウムのテーマは「首都圏大地震と文化財保存を考える」というものでした。大地震などの災害が起きた時には、まず人命を救うということが一番大事ですけれども、その次には資料についても守らなければなりません。そういう体制をどうやったら作れるのかを考えていこうという趣旨だったのですが、神戸や新潟の震災のときの体験を踏まえて、いくつかの報告がありました。

それでわかったのですが、神奈川県では、そういう体制づくりはあまり進んでいないというのが実情なんですね。寒川文書館の建物はずいぶん立派ですから、かなり強い地震にも耐えられると思うのですが、収蔵資料が無事かどうかを確認したり、町内の文化財など

も含めて資料を救うための動員体制を組んだりとか、そういう対応がいざという時のために必要です。神戸や新潟の場合、県内の広範囲にわたって、保存のためのネットワークが組織されていると聞きました。いずれも地元の大学の方が中心になって組織したのだそうですけれども、神奈川県の場合は失礼ながらそういう核になる大学がないと言わざるをえません。

とくにこのあたりは、近々に大きな地震が来るだろうといわれています。ですから、寒川町の中での体制と、県内全域にわたるネットワークの両方をどうするか、類縁機関などとよく話し合って、少し深刻に考えておかなければならないと思います。

圭室　関東大震災では、旧家の土蔵がかなり壊れてしまったと聞きます。もちろん今の建物はそれより大きな地震が来ても大丈夫だという前提で作られているでしょうから、建物が崩壊するような心配はありませんが、中に置いた棚が倒れたりという恐れはありますよね。

鳥養　シンポジウムでよその事例を聞きますと、どの館でどういう資料を持っているとか、個人のお宅にはこんな資料があるとか、そういう情報を市町村が集めたら、それを県立の公文書館へ連絡しておくというやり方をとっているようです。所在情報のバックアップとでも言うんでしょうか、もし担当の機関が壊滅状態になったとしても、別のところが情報を持っていれば、資料の救出体制を組むこともできるのだそうです。

圭室　寒川の場合、資料はマイクロフィルムに撮影し、フィルムの複製を作っています。またフィルムから紙焼きして製本しています。仮に原本が破損してしまっても、3重に複製を作っているので、分散して保存しておけばどれかは残るのではないかと思いますが、さらに情報を分け持とうということですね。

ほかにご提言はありますか。

内海　最近、指定管理者制度というのが話題になることが多くなりました。その制度にのっとらなくても、公の施設の効率化というようなことがよく問題になっています。しかし、文書館の活動については、入館者数で評価するようなことは絶対にするべきではないと思います。

文書館の意味というのは従来、寒川なら寒川の地域で持っていた伝統とか、文化を保存するという、もっと大きな、行政を越えた枠組みの中にあるはずなので、入館者が少ないから不要なんだという議論というのはあってはならないし、そういう発想をしてもらいたくない。職員も、大きな枠組みの中で仕事をするんだという自負を持って、自信を持って運営してほしいと思います。古文書は子孫に残す文化財という認識が必要です。

先ほど鳥養さんがおっしゃったようなネットワークというのは、いざ災害が起きたときにどうするかということなのだと思いますが、普段から文書館を起点にして、資料の所蔵者とか関係者の連絡体制をちゃんと作っておけば、災害のようないざというときにも役立ちますし、日常的にも新しい資料の発見にもつながるわけです。これからまだ寄贈したいという方がだんだん増える可能性だってあるわけです。今ならまだ収蔵庫のスペースがあ

るように見えるけれども、活動がどんどん進めばすぐにいっぱいになってしまいます。いや、もういっぱいだと考えてたほうがいいかもしれません。ではその次をどうするか。いろいろ将来のことを考えなければいけません。なにしろ資料を保存するということは、いまある資料を未来の人たちにバトンタッチするということです。その考え方を行政側もきちんと住民に示さなきゃいけないし、住民のほうにもそれを理解してもらわなきゃいけないんだと思います。

圭室　いまのお話しのようなネットワークにしても、日常のレファレンスにしても、やはり人がいないことにはできませんね。文書館の仕事をサービス業務として位置づけをするならば、ある程度の人員配置をしていただかないとどうにもなりません。

たとえば藤沢市文書館では、はじめ定員を20人としていました。そのうち10名は歴史に精通して古文書を読める専門職員。あとの10名はほかの課から異動してくる一般事務の職員です。なにしろ史料が読めて中身がわかっている人がカウンターに立たないと、利用者が相談に来たときに答えられないわけです。

文書館がオープンしたら、この字は何と読みますかとか、うちの古文書を読んでくださいなんていう相談がきっと来るでしょう。もしそのときに、私はわかりません、なんていう対応をしたら、何のための文書館なんだとすぐに批判されてしまいますね。いま高木さんがとりあえずいますけれど、高木さんが休んだり出張していたりしたときでも、ちゃんと答えられるような職員が1人以上はいないと、さしあたって困るという懸念があります。そのあたりを重くうけとめていただけたらと思います。

ほかに何か提言はございますか。先ほど内海さんがおっしゃったように書庫の問題もすぐに考えなければならないことですね。

内海　すぐいっぱいになっちゃいますでしょうからね。

圭室　所蔵者が寄贈や寄託をお願いしますとせっかく言ってくれても、書庫がいっぱいですからお返ししますというんじゃ具合が悪い。

内海　悉皆調査をおこなったのはもう20年近く前でしょう。そのときは、いったんお借りした資料は、整理や撮影が終わったら、所蔵者にお返ししていました。町の蔵にちゃんとした保存スペースがなかったという事情もありましたが、所蔵者のほうも、収蔵してあった場所に戻せばなんとか保存できていたのです。ところが、だんだん所蔵者側の様子がかわってきた。

木村　代がわりしますからね。

内海　はい。それに建物の改築というのもあります。そうすると、個人の家ではもう持ちきれなくなってしまいます。

大口　そこであいう建物ができると、安心して預けていただけますよね。

圭室　それに古本の市場価値が下がってきたということもあるようです。ちょっと前なら、古本でも古文書でも結構高く買い取っていたようですが、最近はなかなか売れません。ですからそんなところへ売るよりは、地域のために文書館に預けていただくことをお考え

いただきたいのです。

そんなわけで、いろいろ寄贈・寄託をしていただく要因も増えてくることですから、書庫も今はいいですが、すぐに手狭になってしまうと思います。そうしたときにあわてないよう、次の手を考えておく必要があろうかと思います。

以上、いろいろなご意見を頂戴しましたが、そろそろ時間となってしまいました。私たち編集委員も、できる限りサポートしていきたいと思いますので、よりよい文書館の運営をお願いしまして、このへんでお開きにしたいと思います。どうもありがとうございました。

（平成18年5月9日、寒川町役場にて収録したものを加筆修正しました。）

インタビュー
「資料保存の原点—町史編さん事業に託す思い」

[語り手]　前寒川町長　藤沢賢一
前寒川町収入役　清水　進
[聞き手]　町史編集委員長　圭室文雄

1　町史編さん事業のきっかけと準備

圭室　本日はお忙しいなかご出席を賜りまして、誠にありがとうございます。

さてこの秋、寒川総合図書館と併設で、寒川文書館が開館する運びとなりました。古文書、歴史的公文書、写真、地図など、寒川に関するさまざまな記録資料を収集、保存し、皆さんに利用していただこうという施設です。

そのきっかけになったのが、昭和61年度（1986年）にスタートした町史編さん事業です。この事業では『寒川町史』という刊行物を作るために、町の内外を問わず、綿密な資料調査を行いました。その積み重ねといいますか、せっかく集めた資料ですから、一過性のことでなく、将来にむけて保存・活用をしていこうという考え方が、文書館を作るということにつながったのだと思います。

では、もうひとつさかのぼって文書館のルーツは何かということを考えてみますと、それは、その町史編さん事業の立案や準備ということになるのではないかと思います。この過程がなければ、現在の寒川の資料保存の取り組みそのものがなかったかもしれないのですから。

そこで今日は、町史編さん事業開始の英断を下された前町長の藤沢賢一さんと、当時の企画室長として準備の陣頭指揮をとられ、のちに町収入役を務められた清水進さんのお2人にご出席いただき、「資料保存の原点」というテーマで、当時のことを振り返っていただければと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは藤沢さん。編さん事業を始めようとしたきっかけについてお話しいただけませんでしょうか。

藤沢　はい。寒川町には今まで町史らしきものはありませんでした。簡単に寒川の歴史をまとめた本はいくつかありましたけれども、本格的なものはなかったんです。それで、どなたの助言だったかはっきり思い出せないのですが、本格的なものをつくったほうがいいんじゃないかというような問いかけがあって、まさにそのとおりだなと思ったのです。誰かがそのうちやるだろうではなくて、誰かが思い切ってやらなきゃいけないんだと思い、

③寒川町史刊行物と編集委員の任期

年度	西暦	刊行物						編集委員任期												
		本編	町史研究	報告書	資料目録	新聞目録	その他	児玉	圭室	木村	鈴木	鳥養	大口	丹羽	内海	山本	宮本	小川	佐藤	松岡
S60	1985																			
S61	1986				①															
S62	1987		①座談会「町史編さんと資料保存」		②															
S63	1988		②特集・寒川神社 【圭室】		③・④	①														
H１	1989		③特集・近代寒川のあゆみ 【丹羽・内海】		⑤	②														
H２	1990	①資料編 古代・中世／近世 【鳥養・大口】	④特集・高野聖と相模国 【圭室】		⑥	③														
H３	1991	⑫別編 民俗 【宮本】	⑤特集・寒川の民俗 【宮本】	①高野山高室院資料(1) 【圭室】	⑦	④														
H４	1992	④資料編近現代1【丹羽・内海】 ⑪別編 美術工芸 【佐藤】	⑥特集・相模海軍工廠 【丹羽・内海】	②高野山高室院資料(2)【圭室】 ③はなし・ことば・あそび・うた【宮本】	⑧	⑤														
H５	1993	②資料編 近世 【大口】	⑦特集・江戸時代の寒川 【大口】	④近代寒川の要覧と人物伝 【内海】	⑨	⑥														
H６	1994	⑤資料編 近現代2【丹羽・内海】 ⑨別編 神社 【圭室】	⑧特集・相模海軍工廠Ⅱ 【内海】	⑤ことばのしおり 【宮本】	⑩	⑦														
H７	1995	③資料編 近世3 【大口】	⑨特集・寒川の女性たち 【大口】	⑥高野山高室院資料(3) 【圭室】	⑪	⑧														
H８	1996	⑧別編 考古 【木村】	⑩特集・相模海軍工廠Ⅲ 【内海】	⑦明治初期の御用留 【大口】	⑫	⑨														
H９	1997	⑩別編 寺院 【圭室】	⑪特集・数字でみる寒川 【山本】	⑧旭学校沿革誌 【(岩城)】	⑬															
H10	1998	⑥通史 古代・中世・近世 【鳥養・大口】	⑫特集・町史編さん資料の保存と活用	⑨近現代の石造物		⑩														
H11	1999		⑬特集・梶原景時と一宮 【鳥養】	⑩寒川神社日記(1) 【圭室】	⑭															
H12	2000	⑦通史 近現代【山本・内海】 ⑮別編 図録	⑭特集・写真資料の保存と活用	⑪寒川神社日記(2) 【圭室】		⑪														
H13	2001	⑬別編 事典・年表	⑮特集・寒川のみち 【圭室】	⑫浜降祭日記 【圭室】	⑮															
H14	2002	⑭別編 統計【山本】 ⑯別編 ダイジェスト	⑯特集・町史編さん事業の軌跡	⑬寒川の絵はがき 【(松岡)】																

担当巻の発刊後、次の担当巻まで間がある場合、任期が一時的に切れる運用を行った。

年度	西暦	刊行物						編集委員任期												
		本編	町史研究	報告書	資料目録	新聞目録	その他	児玉	圭室	木村	鈴木	鳥養	大口	丹羽	内海	山本	宮本	小川	佐藤	松岡
H15	2003		⑰特集・寒川の災害【内海】	⑭浜降祭日記(2)【圭室】					■	■		■	■		■	■				
H16	2004		⑱特集・新しい考古学の成果【木村】	⑮国勢調査と寒川【山本】					■	■		■	■		■	■				
H17	2005		⑲特集・使ってみよう寒川の記録資料【圭室】		⑯				■	■		■	■		■	■				
H18	2006		⑳特集・ようこそ文書館へ【圭室】				開館記念誌		■	■		■	■		■					
H19	2007		㉑特集・追討児玉幸多先生・開館１周年記念事業【圭室】	⑯占領軍時代の寒川町警察【内海】					■	■		■	■		■					
H20	2008		㉒特集・高野聖と相模国Ⅱ【圭室】						■	■		■	■		■					
H21	2009		㉓特集・花川用水と目久尻川【大口】	⑰浜降祭日記(3)【圭室】					■	■		■	■		■					
H22	2010						70周年記念誌【内海】		■	■		■	■		■					
H23	2011		㉔特集・相模線とその記録						■	■		■	■		■					
H24	2012		㉕特集・明治時代の寒川神社【圭室】	⑱寒川町長の所信表明と施政方針【内海】					■	■		■	■		■					
H25	2013		㉖特集・関東大震災と寒川【内海】	⑲浜降祭日記(4)【圭室】					■	■		■	■		■					
H26	2014		㉗特集・下寺尾官衙遺跡群を学ぶ【木村】	⑳寒川神社日記(3)【圭室】					■	■		■	■		■					
H27	2015		㉘特集・寒川と茅ヶ崎の浜降祭【圭室】	㉑大蔵自治会文書(1)【内海】					■	■		■	■		■					
H28	2016			㉒寒川のマッチラベル【内海】					■	■		■	■		■					
H29	2017		㉙特集・襖に閉じ込められた地域の歴史						■	■		■	■		■					
H30	2018		㉚特集・マッチラベルのデジタルアーカイブ【内海】						■	■		■	■		■					
R1	2019		㉛特集・広報にみる昭和と平成						■		■	■	■		■					
R2	2020		㉜特集・町制施行80周年【内海】						■		■	■	■		■					
R3	2021		㉝特集・梶原景時とその時代【鳥養】						■		■	■			■					
R4	2022		㉞（講演録他）						■			■			■					
R5	2023		㉟特集・国登録有形文化財広田医院と広田家の人びと【内海】						■			■			■					
R6	2024		㊱（講演録他）						■			■			■					■
R7	2025		㊲（インタビュー他）												■					■

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
1988年3月	1			創刊のことば	藤沢賢一	趣旨文
1988年3月	1			「町史研究」の発刊にあたって	広田富治	趣旨文
1988年3月	1	座談会		寒川町史編さんと資料保存		座談会記録
1988年3月	1	論文		砂利の近代史―相模川砂利を中心として（上）―	内海孝	論考
1988年3月	1	歴史への扉		考古学入門（一）	木村勇	論考
1988年3月	1	歴史への扉		仏像のみかた（一）	佐藤昭夫	論考
1988年3月	1	歴史への扉		身近な民俗学（一）―味噌をめぐる民俗―	宮本袈裟雄	論考
1988年3月	1			寒川町史基本構想		業務資料
1988年3月	1	表紙解説		相州大山道田村渡の景（一勇斎国芳画、神奈川県立歴史博物館蔵）	橋本健一郎	史資料紹介
1989年3月	2	特集	寒川神社	特集にあたって	圭室文雄	趣旨文
1989年3月	2	特集	寒川神社	寒川神社の戦後をふりかえって	瀧本正彦	論考
1989年3月	2	特集	寒川神社	寒川神社の思い出	語り手　橋本甚一、聞き手　丹羽邦男	インタビュー記録
1989年3月	2	特集	寒川神社	明治期の浜降祭出御について	圭室文雄	論考
1989年3月	2	特集	寒川神社	寒川神社所蔵の伝武田信玄奉納･鉄錆地六十二間筋兜について	八幡義信	調査記録
1989年3月	2	特集	寒川神社	一宮制研究史	根本誠二	論考
1989年3月	2	特集	寒川神社	大（応）神塚古墳の発掘	木村勇	論考
1989年3月	2	論文		砂利の近代史―相模川砂利を中心として―（下）	内海孝	論考
1989年3月	2	歴史への扉		考古学入門（二）―旧石器時代、縄文時代―	鈴木保彦	論考
1989年3月	2	歴史への扉		仏像のみかた（二）	佐藤昭夫	論考
1989年3月	2	歴史への扉		身近な民俗学（二）―寒川町の方言・養蚕語彙を中心に―	和泉善子	論考
1989年3月	2	表紙解説		相模国一宮寒川神社境内図　乙図（部分、寒川神社所蔵）		史資料紹介
1990年3月	3	特集	村制百年、町制五十年―近代寒川のあゆみ―	特集にあたって―新しき村の“模範”寒川―	内海孝	趣旨文
1990年3月	3	特集	村制百年、町制五十年―近代寒川のあゆみ―	近世の村から寒川町へ	児玉幸多	論考
1990年3月	3	特集	村制百年、町制五十年―近代寒川のあゆみ―	一之宮村にみる維新期土地所有の変動	丹羽邦男	論考

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
1990年3月	3	特集	村制百年、町制五十年―近代寒川のあゆみ―	学校―寒川の教育のあゆみ―	岩城清一	論考
1990年3月	3	特集	村制百年、町制五十年―近代寒川のあゆみ―	暮らしの移り変わり―伝統的生活の変化―	杉井純一・中里一朗・堀江俊一	論考
1990年3月	3	一枚の写真		町制十周年記念事業―昭和二十五年（一九五〇）―	事務局	史資料紹介
1990年3月	3	論文		中瀬景観寺と行基	根本誠二	論考
1990年3月	3	歴史への扉		考古学入門（三）―縄文時代（二）―	鈴木保彦	論考
1990年3月	3	歴史への扉		仏像のみかた（三）	佐藤昭夫	論考
1990年3月	3	歴史への扉		身近な民俗学（三）―ジルイ・ジエンと家の儀礼―	小川正恭	論考
1990年3月	3	視察研修レポート		埼玉県立歴史資料館・群馬県立文書館	海老根隆史	調査記録
1990年3月	3	表紙解説		倉見の土手桜（茅ヶ崎市共恵　伊沢正一氏画）		史資料紹介
1991年3月	4	特集	高野聖と相模国	高野山高室院の調査について	圭室文雄	調査記録
1991年3月	4	特集	高野聖と相模国	相模国における古義真言宗の末寺	圭室文雄	論考
1991年3月	4	特集	高野聖と相模国	天文一一年～元和二年における相模国月牌帳	圭室文雄	論考
1991年3月	4	特集	高野聖と相模国	「相模国登山帳」にみる高野山参詣の動向	松岡俊	論考
1991年3月	4	特集	高野聖と相模国	相模国高座郡の名主の変遷―高室院文書を中心に―	井上淳	論考
1991年3月	4	特集	高野聖と相模国	「月牌帳」にみる寒川から高野参詣した人々	圭室文雄	論考
1991年3月	4	特集	高野聖と相模国	「相模国廻檀帳」にみえる寒川の人々―人名一覧表―	栗田隆雄	論考
1991年3月	4	特集	高野聖と相模国	「相模国檀廻日並記」にみる勧化と村方の対応	根本誠二・鈴木良明	論考
1991年3月	4	特集	高野聖と相模国	高野聖の土産物について	田宮明博	論考
1991年3月	4	編集の窓		『寒川町史』古代・中世編編さんを顧みて	鳥養直樹	業務記録
1991年3月	4	一枚の写真		福羽いちご―昭和十年（一九三五）―	事務局	史資料紹介
1991年3月	4	研究ノート		日本人の方忌と方位除信仰	加藤迪夫	論考
1991年3月	4	歴史への扉		考古学入門（四）―弥生時代―	鈴木保彦	論考
1991年3月	4	歴史への扉		石造物のみかた	斉藤彦司	論考
1991年3月	4	歴史への扉		身近な民俗学（四）―年中行事と講の諸相―	古家信平	論考

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
1991年3月	4	視察研修レポート		伊能忠敬記念館・千葉県立大利根博物館・八潮市立資料館	小沢完吉	調査記録
1991年3月	4	表紙解説		高野山水屏風（文化庁所蔵）	相澤正彦	史資料紹介
1992年3月	5	特集	寒川の民俗	特集にあたって	宮本袈裟雄	趣旨文
1992年3月	5	特集	寒川の民俗	座談会・町史民俗編の執筆を終えて		座談会記録
1992年3月	5	特集	寒川の民俗	食生活の構成―一之宮の事例から―	高橋明子	論考
1992年3月	5	特集	寒川の民俗	戦後寒川の農業改良普及事業と生活改善	大澤リウ	論考
1992年3月	5	特集	寒川の民俗	民俗のとらえかた―衣食住を中心にして―	宮本袈裟雄	論考
1992年3月	5	一枚の写真		小学校の農業教育―昭和四年（一九二九）―	高木秀彰	史資料紹介
1992年3月	5	インタビュー		相模川の砂利生産の半世紀―野崎清治氏聞き書き―	語り手　野崎清治、聞き手　内海孝	インタビュー記録
1992年3月	5	歴史への扉		考古学入門（五）―古墳時代―	鈴木保彦	論考
1992年3月	5	歴史への扉		工芸品のみかた（一）	八幡義信	論考
1992年3月	5	歴史への扉		身近な民俗学（五）―寒川の世間話―	山崎祐子	論考
1992年3月	5	視察研修レポート		浜松市博物館・細江町立姫街道歴史民俗資料館・新居町新居関所史料館（静岡県）	広田富治	調査記録
1992年3月	5	表紙解説		相模川左岸用水路と水車（田口雅巳氏画）		史資料紹介
1993年3月	6	特集	相模海軍工廠	寒川町と相模海軍工廠	丹羽邦男	論考
1993年3月	6	特集	相模海軍工廠	昭和産業と相模海軍工廠の七年半―阿藤秀雄氏聞き書きと日記―	語り手　阿藤秀雄、聞き手　内海孝	インタビュー記録
1993年3月	6	特集	相模海軍工廠	技術下士官の体験から	語り手　高橋市太郎、聞き手　高木秀彰	インタビュー記録
1993年3月	6	特集	相模海軍工廠	座談会　相模海軍工廠の学徒動員について―県立湘南中学校のばあい―		座談会記録
1993年3月	6	特集	相模海軍工廠	相模海軍工廠関連文献		文献紹介
1993年3月	6	史料紹介		青年会における支部活動―田端青年会活動日誌「記録」―	及川清秀	史資料紹介
1993年3月	6	歴史への扉		工芸品のみかた（二）	八幡義信	論考
1993年3月	6	歴史への扉		身近な民俗学（六）―畑作と食生活―	伊澤裕実	論考
1993年3月	6	書評		『寒川町史』12　別編　民俗を読んで	田中宣一	書評
1993年3月	6	最近の調査から		越の山横穴墓群を歩く	木村勇	調査記録
1993年3月	6	視察研修レポート		寒河江市史編纂室・いでは文化記念館（山形県）	斎藤光	調査記録
1993年3月	6	表紙解説		宮山中里付近の目久尻川（皆川静波氏画）		史資料紹介
1994年3月	7	特集	江戸時代の寒川	花川用水の堰普請と用水組合	馬場弘臣	論考

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
1994年3月	7	特集	江戸時代の寒川	相給村落と分郷―相模国高座郡一之宮村の事例―	井上攻	論考
1994年3月	7	特集	江戸時代の寒川	近世における「家」意識― 一之宮村入沢家を題材として―	桜井昭男	論考
1994年3月	7	特集	江戸時代の寒川	琴を愛でた旗本杉浦正職―丹波の碑文を手がかりに―	大口勇次郎	論考
1994年3月	7	インタビュー―		寒川村人権蹂躙事件の弁護士を誇りとして―早川喜代次氏聞き書き―	語り手　早川喜代次、聞き手　内海孝	インタビュー記録
1994年3月	7	一枚の写真		横須賀からの学童疎開	岩城清一	史資料紹介
1994年3月	7	歴史への扉		身近な民俗学（七）―世間との交渉―	青木俊也	論考
1994年3月	7	寒川の遺跡		岡田遺跡と縄文時代の集落	鈴木保彦	遺跡紹介
1994年3月	7	書評		『寒川町史』11　別編　美術工芸	三山進	書評
1994年3月	7	最近の調査から		出羽三山参詣資料	鈴木良明	史資料紹介
1994年3月	7	視察研修レポート		江戸東京博物館・西那須野町郷土資料館・小山市博物館	原田賢三	調査記録
1994年3月	7	表紙解説		大岡政談　天一坊事件役者絵（二代歌川国貞画、早稲田大学演劇博物館蔵、協力　朝日新聞社）		史資料紹介
1995年3月	8	特集	相模海軍工廠Ⅱ	相模海軍工廠と徴用・施設・疎開―近くて遠い実像をもとめて―	内海孝	論考
1995年3月	8	特集	相模海軍工廠Ⅱ	相模海軍工廠の徴用工と毒ガス兵器―河中修厂氏聞き書き―	語り手　河中修厂、聞き手　内海孝	インタビュー記録
1995年3月	8	特集	相模海軍工廠Ⅱ	宮山寮からみた相模海軍工廠	語り手　高橋シゲ・太田千代子、聞き手　内海孝	インタビュー記録
1995年3月	8	特集	相模海軍工廠Ⅱ	座談会　相模海軍工廠と学徒動員―相洋中学校のばあい―		座談会記録
1995年3月	8	特集	相模海軍工廠Ⅱ	相模海軍工廠関連文献Ⅱ		文献紹介
1995年3月	8	最近の調査から		川口村・学徒動員交流のつどい	高木秀彰	調査記録
1995年3月	8	手記		青年のみた田端の生活と戦争	大川明	史資料紹介
1995年3月	8	歴史への扉		身近な民俗学（八）―方言調査の性格とその概要―	善理信昭	論考
1995年3月	8	寒川の遺跡		大蔵東原遺跡の調査と方形周溝墓群	鈴木保彦	遺跡紹介
1995年3月	8	書評		『寒川町史』2　資料編　近世（2）	細井守	書評
1995年3月	8	視察研修レポート		戸田市立郷土博物館・群馬県立歴史博物館	石黒誠	調査記録
1995年3月	8	表紙解説		四之宮の渡し（岩田實氏画）		史資料紹介
1996年3月	9	特集	寒川の女性たち	特集にあたって	大口勇次郎	趣旨文
1996年3月	9	特集	寒川の女性たち	近世後期寒川の婚姻と離婚	井上攻	論考

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
1996年3月	9	特集	寒川の女性たち	処女会の設立と実業補習学校―高座郡域を中心に―	及川清秀	論考
1996年3月	9	特集	寒川の女性たち	座談会・寒川の農家に嫁いで		座談会記録
1996年3月	9	論文		「相模国天平七年封戸租交易帳」からみた天平時代の相模国―とくに、封主、天武天皇系論の再検討を中心に―	鳥養直樹	論考
1996年3月	9	寒川の遺跡		寒川町内の横穴墓群―越の山横穴群を中心として―	鈴木保彦	遺跡紹介
1996年3月	9	書評		『寒川町史』5　資料編　近・現代（2）	松村敏	書評
1996年3月	9	書評		『寒川町史』9　別編　神社	宮田登	書評
1996年3月	9	視察研修レポート		磐田市旧見付学校・沼津市明治史料館	菊地良夫	調査記録
1996年3月	9	表紙解説		雛図一幅　狩野探淵筆　個人蔵	相澤正彦	史資料紹介
1997年3月	10	特集	相模海軍工廠Ⅲ	相模海軍工廠の全体像と相対化―とくに女子挺身隊と陸軍の毒ガス製造をめぐって―	内海孝	論考
1997年3月	10	特集	相模海軍工廠Ⅲ	相模海軍工廠の女子挺身隊―寒川隊のばあい―	聞き手　内海孝	インタビュー記録
1997年3月	10	特集	相模海軍工廠Ⅲ	三島隊　その動員から帰郷まで―アンケート調査の整理を通して―	及川清秀	論考
1997年3月	10	特集	相模海軍工廠Ⅲ	第一次挺身隊として―山梨県明見隊聞き書き―	聞き手　及川清秀	インタビュー記録
1997年3月	10	特集	相模海軍工廠Ⅲ	相模海軍工廠へ動員された人たち	及川清秀	論考
1997年3月	10	特集	相模海軍工廠Ⅲ	広島県大久野島の陸軍毒ガス製造の過去と現在―村上初一氏聞き書き―	語り手　村上初一、聞き手　内海孝	インタビュー記録
1997年3月	10	特集	相模海軍工廠Ⅲ	相模海軍工廠関連文献Ⅲ	事務局	文献紹介
1997年3月	10	論文		関東取締出役太田源助の活動について	椿田卓士	論考
1997年3月	10	最近の調査から		万部寺と日桂聖人をめぐって	松岡俊	調査記録
1997年3月	10	書評		『寒川町史』3　資料編　近世（3）を読んで	浅倉有子	書評
1997年3月	10	視察研修レポート		入間市博物館・大間々町誌編さん室	金子匡	調査記録
1997年3月	10	表紙解説		廃工場（小泉喜代次氏画）		史資料紹介
1998年3月	11	特集	数字でみる寒川―統計編の編集にむけて―	日本の近代統計について―歴史資料としての統計―	山本弘文	論考
1998年3月	11	特集	数字でみる寒川―統計編の編集にむけて―	村税戸数割について	山本弘文	論考

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
1998年3月	11	特集	数字でみる寒川―統計編の編集にむけて―	はじめての国勢調査	及川清秀	論考
1998年3月	11	特集	数字でみる寒川―統計編の編集にむけて―	日常生活のなかの戦争―寒川町国民学校日誌にみる防空警報―	内海孝・後藤功	論考
1998年3月	11	特集	数字でみる寒川―統計編の編集にむけて―	義務教育と就学率	岩城清一	論考
1998年3月	11	特集	数字でみる寒川―統計編の編集にむけて―	統計の誕生―寒川で統計ができあがるまで―	内海孝・北村やよい	論考
1998年3月	11	誌上講演会		相模線と沿線市町村	山本弘文	講演会記録
1998年3月	11	展示会記録		相模線　きのう・きょう・あした		展示記録
1998年3月	11	最近の調査から		西岡田八坂神社の神輿	高木秀彰	調査記録
1998年3月	11			相模海軍工廠関連文献Ⅳ	事務局	文献紹介
1998年3月	11	表紙解説		第一回国勢調査記念絵葉書（入沢章氏蔵）		史資料紹介
1999年3月	12	特集	町史編さん資料の保存と活用	座談会・寒川町の資料保存と活用について―町史編さん事業のあとにくるもの―	（編集委員）	座談会記録
1999年3月	12	特集	町史編さん資料の保存と活用	市町村史編さんと地域史料の収集・保存を考える―埼玉県戸田市の事例から―	佐藤勝巳	論考
1999年3月	12	特集	町史編さん資料の保存と活用	町史編さん資料の調査と整理	高木秀彰	業務記録
1999年3月	12	特集	町史編さん資料の保存と活用	レファレンス日誌から	高木秀彰	業務記録
1999年3月	12	小特集	相模海軍工廠Ⅳ	手記・寒川町国民学校の学童勤労動員	相原實	史資料紹介
1999年3月	12	小特集	相模海軍工廠Ⅳ	女子挺身隊同窓会同行記	及川清秀	業務記録
1999年3月	12	小特集	相模海軍工廠Ⅳ	相模海軍工廠関連文献Ⅴ	事務局	文献紹介

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
1999年3月	12	史料紹介		日露戦争と戦後の寒川村事務報告―楠谷茂正家文書から新たに出現―	内海孝	史資料紹介
1999年3月	12	展示会記録		寒川の街かどいまむかし	事務局	展示記録
1999年3月	12	書評		『寒川町史』10　別編　寺院	長野覺	書評
1999年3月	12	表紙解説		地神講掛軸（一之宮北中町講中旧蔵）		史資料紹介
2000年3月	13	特集	梶原景時と一宮	特集にあたって	鳥養直樹	趣旨文
2000年3月	13	特集	梶原景時と一宮	講演会「御家人梶原景時の実像」	伊藤一美	講演会記録
2000年3月	13	特集	梶原景時と一宮	梶原氏研究の動向と関係論文の紹介	中元幸二	文献紹介
2000年3月	13	特集	梶原景時と一宮	各地の梶原氏顕彰会　寒川町梶原公顕彰会について	広田富治	論考
2000年3月	13	特集	梶原景時と一宮	各地の梶原氏顕彰会　清水梶原会について	守永了俊	論考
2000年3月	13	特集	梶原景時と一宮	各地の梶原氏顕彰会　犬山市梶原景時公顕彰会について	吉野淳夫	論考
2000年3月	13	特集	梶原景時と一宮	各地の梶原氏顕彰会　梶原御霊神社氏子会について	石井道喜	論考
2000年3月	13	特集	梶原景時と一宮	展示会記録「梶原景時と一宮館」		展示記録
2000年3月	13	資料紹介		石造物調査報告―『寒川町史』・『寒川町史調査報告書』の補遺―	鈴木忍	史資料紹介
2000年3月	13	講演会記録		町内遺跡発掘調査発表会	小林義典・小林秀満・秋山重美	講演会記録
2000年3月	13	書評		『寒川町史』8　別編　考古―掘り出された寒川町の太古―	賀川光夫	書評
2000年3月	13	書評		『寒川町史』6　通史　原始･古代･中世･近世	賀川光夫・杉山博久・佐藤和夫・針谷武志	書評
2000年3月	13	資料		町史編さん資料の保存・活用に関する要望書	町史編さん審議会	業務資料
2000年3月	13			相模海軍工廠関連文献Ⅵ	事務局	文献紹介
2000年3月	13	表紙解説		石橋山図（狩野惟信画、東京国立博物館蔵）		史資料紹介
2001年3月	14	特集	写真資料の保存と活用	『図録さむかわ』について	圭室文雄	論考
2001年3月	14	特集	写真資料の保存と活用	寒川町史編さん事業における写真資料	高木秀彰	業務記録
2001年3月	14	特集	写真資料の保存と活用	小平市の郷土資料収集事業と写真	高木秀彰	調査記録

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
2001年3月	14	特集	写真資料の保存と活用	レファレンス日誌から―写真資料を中心に―	高木秀彰	業務記録
2001年3月	14	特集	写真資料の保存と活用	展示会記録「寒川町の60年」		展示記録
2001年3月	14	講演会記録		鎌倉本體の武士・梶原景時―八〇〇年の時を超えた現代性―	佐藤和夫	講演会記録
2001年3月	14	研究ノート		寒川の酒造業	田中勉	論考
2001年3月	14	座談会		横須賀からの学童集団疎開		座談会記録
2001年3月	14	史料紹介		学童集団疎開引率教員の日記	椿田卓士	史資料紹介
2001年3月	14			相模海軍工廠関連文献Ⅶ	事務局	文献紹介
2001年3月	14	表紙解説		小動神社（島田勇氏画、市川元久氏蔵）		史資料紹介
2002年3月	15	特集	寒川のみち	特集にあたって	圭室文雄	趣旨文
2002年3月	15	特集	寒川のみち	講演会記録「大山道と寒川」	松岡俊	講演会記録
2002年3月	15	特集	寒川のみち	「一之宮」への道―寒川関係の道標集成―	鈴木忍	論考
2002年3月	15	特集	寒川のみち	寒川町内の近世交通関係資料	椿田卓士	史資料紹介
2002年3月	15	特集	寒川のみち	展示会記録「大山道と寒川」	高木秀彰	展示記録
2002年3月	15	史料紹介		明治三年「岡田村明細帳」	加瀬大	史資料紹介
2002年3月	15	参加記		宮山中里遺跡見学会参加記―相模川東岸の低地古墳群の発見を中心に―	須藤智夫	業務記録
2002年3月	15	書評		『寒川町史』7　通史　近･現代	阿部恒久	書評
2002年3月	15	書評		『寒川町史』15　別編　図録さむかわ	山口博	書評
2002年3月	15	表紙解説		東海道五十三次細見図会程ケ谷道中風俗（初代歌川広重画、神奈川県立歴史博物館蔵）		史資料紹介
2003年3月	16	特集	町史編さん事業の軌跡	座談会・町史編さん事業―これまでのこと・これからのこと―	町史編集委員会	座談会記録
2003年3月	16	特集	町史編さん事業の軌跡	組織と事業の記録		業務記録
2003年3月	16	特集	町史編さん事業の軌跡	文書館の業務に関する提言書	町史編さん審議会	業務資料
2003年3月	16	書評		『寒川町史』13 別編　事典･年表	菅根幸裕	書評
2003年3月	16	展示会記録		浜降祭と寒川	高木秀彰	展示記録
2003年3月	16	表紙解説		寒川神社由緒古墳平面図（明治四十一年、寒川神社蔵）		史資料紹介
2004年3月	17	特集	寒川の災害	特集にあたって―関東大震災と寒川―	内海孝	趣旨文
2004年3月	17	特集	寒川の災害	聞き書き・関東大震災の記憶	語り手阿諏訪庚二、聞き手高木秀彰	インタビュー記録
2004年3月	17	特集	寒川の災害	講演記録・寒川神社震災復興と絵はがき	松岡俊	講演会記録
2004年3月	17	特集	寒川の災害	史料紹介・関東大震災の記録	高木秀彰・椿田卓士	史資料紹介
2004年3月	17	特集	寒川の災害	寒川町の災害年表	椿田卓士	史資料紹介
2004年3月	17	講演会記録		町史講座・砂利の近代史と寒川	内海孝	講演会記録

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
2004年3月	17	研究ノート		『源平闘諍録』の梶原氏	渡辺真治	論考
2004年3月	17	資料		寒川町歴史資料保存活用基本計画		業務資料
2004年3月	17	資料		（仮称）寒川町総合図書館基本計画（抄）		業務資料
2004年3月	17	展示会記録		寒川の絵はがき	高木秀彰	展示記録
2004年3月	17	表紙解説		相模川普請絵図（安政二年＝一八五五、一之宮八幡大神蔵）		史資料紹介
2005年3月	18	特集	新しい考古学の成果	特集にあたって	木村勇	趣旨文
2005年3月	18	特集	新しい考古学の成果	新発見の遺跡からみた寒川町の歴史―旧石器時代から歴史時代まで―	鈴木保彦	論考
2005年3月	18	特集	新しい考古学の成果	岡田南河内遺跡（寒川町№69遺跡）	井辺一徳	遺跡紹介
2005年3月	18	特集	新しい考古学の成果	宮山遺跡（№14遺跡）	瀬田哲夫	遺跡紹介
2005年3月	18	特集	新しい考古学の成果	倉見才戸遺跡第5・6次調査	林原利明	遺跡紹介
2005年3月	18	講演会記録		町史講座・梶原景時と源義経―その光と影―	鳥養直樹	講演会記録
2005年3月	18	講演会記録		公文書が語りかけるもの―公文書保存と歴史資料の活用―	高野修	講演会記録
2005年3月	18	講演会記録		町史編さん事業―これまでのこと・これからのこと―	高木秀彰	講演会記録
2005年3月	18	研究ノート		浜降祭をささえてきた人々	高橋清	論考
2005年3月	18	書評		『寒川町史』14　別編　統計	高村直助	書評
2005年3月	18	書評		『寒川町史』16　別編　ダイジェスト「さむかわ歴史ものがたり100」	石井日出男	書評
2005年3月	18	展示会記録		公文書が語る歴史―生涯学習と公民館―	高木秀彰	展示記録
2005年3月	18	表紙解説		大塚横穴墓実測図（昭和三十一年＝一九五六、赤星直忠氏作成、かながわ考古学財団所蔵）		史資料紹介
2006年3月	19	特集	使ってみよう寒川の記録資料	特集にあたって	圭室文雄	趣旨文
2006年3月	19	特集	使ってみよう寒川の記録資料	テーマ別　調べものの手引き	渡辺真治・涌井有希子	文献紹介
2006年3月	19	特集	使ってみよう寒川の記録資料	寒川の50冊―地域文献活用ガイド―	涌井有希子・渡辺真治	文献紹介
2006年3月	19	特集	使ってみよう寒川の記録資料	レファレンス業務の展望	松岡俊	業務記録

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
2006年3月	19	特集	使ってみよう寒川の記録資料	古文書講座の成果と課題	高木秀彰	業務記録
2006年3月	19	講演会記録		町史講座・大岡忠相と田沼意次―江戸時代の領主たち―	大口勇次郎	講演会記録
2006年3月	19	展示会記録		国勢調査と寒川―公文書が語る歴史2―	高木秀彰	展示記録
2006年3月	19	資料		（仮称）寒川町文書館の運営に関する協議結果の報告		業務資料
2006年3月	19	資料		寒川文書館運営方針		業務資料
2006年3月	19	表紙解説		寒川総合図書館完成予想図（小林建築事務所作成）		史資料紹介
2007年3月	20	特集	ようこそ！文書館へ	特集にあたって	圭室文雄	趣旨文
2007年3月	20	特集	ようこそ！文書館へ	寒川文書館開館記念講演「地域の歴史を学ぶ喜び―市民がどう歴史史料とむきあうか―」	平野雅道	講演会記録
2007年3月	20	特集	ようこそ！文書館へ	職員研修会「市町村文書館の役割」	安藤正人	講演会記録
2007年3月	20	特集	ようこそ！文書館へ	「クイズ　きみも寒川はかせ」の作成にあたって	渡辺真治	業務記録
2007年3月	20	特集	ようこそ！文書館へ	レファレンス日誌から（3）	高木秀彰	業務記録
2007年3月	20	寒川の遺跡		岡田大塚遺跡（№58遺跡）	林原利明	遺跡紹介
2007年3月	20	資料		『寒川町史研究』総目次（１～20号）		業務資料
2007年3月	20	表紙解説		寒川総合図書館・文書館（守屋政子氏画）		史資料紹介
2008年3月	21	特集	追悼　児玉幸多先生	特集にあたって	圭室文雄	趣旨文
2008年3月	21	特集	追悼　児玉幸多先生	インタビュー・児玉先生を偲ぶ	語り手　山田文夫・三澤誠、聞き手　圭室文雄	インタビュー記録
2008年3月	21	特集	追悼　児玉幸多先生	座談会・児玉先生　寒川での足跡	町史編集委員会	座談会記録
2008年3月	21	講演会記録		町史講座・江戸時代の道―田村通り大山道を中心に―	飯田孝	講演会記録
2008年3月	21	寒川文書館開館一周年記念事業		開館一周年記念事業について	高木秀彰	業務記録
2008年3月	21	寒川文書館開館一周年記念事業		町史講座・武田信玄と筋兜鉢	八幡義信	講演会記録
2008年3月	21	寒川文書館開館一周年記念事業		特別展「図書館・文書館ができるまで」	佐藤紘司	展示記録
2008年3月	21	寒川文書館開館一周年記念事業		上映会「映像で見る懐かしの寒川」	高木秀彰	業務記録
2008年3月	21	展示会記録		寒川の学校一三〇年のあゆみ―学校教育資料の紹介をとおして―	涌井有希子	展示記録

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
2008年3月	21	展示会記録		昭和40年のまち探検―地図と写真でたどる寒川のすがた―	渡辺真治	展示記録
2008年3月	21	講座記録		江戸時代の古文書	涌井有希子	業務記録
2008年3月	21	講座記録		梶原景時の史料を読む―吾妻鏡の世界―	渡辺真治	業務記録
2008年3月	21	レファレンスツール		目久尻川関係史料目録	涌井有希子	史資料紹介
2008年3月	21	表紙解説		御座松（三沢一雄氏画）		史資料紹介
2009年3月	22	特集	高野聖と相模国Ⅱ	特集にあたって	圭室文雄	趣旨文
2009年3月	22	特集	高野聖と相模国Ⅱ	町史講座・相模路を歩いた高野聖たち―「檀廻日並記」に見る弘法大師信仰―	圭室文雄	講演会記録
2009年3月	22	特集	高野聖と相模国Ⅱ	資料紹介・高室院の廻檀日並	椿田有希子	史資料紹介
2009年3月	22	講演会記録		資料保存活用講演会・市民がつどう史料館―尼崎市立地域研究史料館に学ぶ―	辻川敦	講演会記録
2009年3月	22	展示会記録		百年前の発掘調査―記録資料にみる大神塚古墳―	渡辺真治	展示記録
2009年3月	22	展示会記録		かながわの国体―1955・1998―	佐藤紘司	展示記録
2009年3月	22	講座記録		江戸時代の古文書	高木秀彰	業務記録
2009年3月	22	講座記録		梶原景時の史料を読む―吾妻鏡の世界Ⅱ―	渡辺真治	業務記録
2009年3月	22	実習レポート		寒川文書館とアーカイブズ実習	清水惠枝	職員外レポート
2009年3月	22	表紙解説		高野山大黒天掛軸（一之宮　広田直士氏所蔵）		史資料紹介
2010年3月	23	特集	花川用水と目久尻川	特集にあたって	大口勇次郎	趣旨文
2010年3月	23	特集	花川用水と目久尻川	町史講座・さむかわ用水路物語―花川用水と目久尻川―	馬場弘臣	講演会記録
2010年3月	23	特集	花川用水と目久尻川	資料紹介・花川用水関係史料	椿田有希子	史資料紹介
2010年3月	23	講演会記録		図書館・文書館の底力―情報資源をみんなのために・未来のために―	佐藤勝巳	講演会記録
2010年3月	23	展示会記録		広報さむかわの60年	椿田有希子	展示記録
2010年3月	23	展示会記録		寒川村ができたころ― 一二〇年前の世界―	林宏美	展示記録
2010年3月	23	講座記録		江戸時代の古文書	高木秀彰	業務記録
2010年3月	23	講座記録		梶原景時の史料を読む―吾妻鏡の世界Ⅲ―	渡辺真治	業務記録
2010年3月	23	表紙解説		平太郎堰伏替規約書（寒川町蔵）		史資料紹介
2012年3月	24	特集	相模線とその記録	キハ35を追いかけて―写真家が記録した相模線の気動車―	則直泰	講演会記録
2012年3月	24	特集	相模線とその記録	商家からみた寒川駅前	話し手　宮代鈴子、聞き手　高木秀彰	インタビュー記録

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
2012年3月	24	特集	相模線とその記録	国鉄職員のみた寒川駅	話し手　大久保嘉幸、聞き手　高木秀彰	インタビュー記録
2012年3月	24	特集	相模線とその記録	相模線関連イベント	高木秀彰	業務記録／展示記録
2012年3月	24	特集	相模線とその記録	資料紹介・相模線の新聞記事	武藤容子・鳥養圭美	史資料紹介
2012年3月	24	講演会記録		未来に伝えよう　公民館の記録	高野修	講演会記録
2012年3月	24	講演会記録		小学校の農業教育の試み―清水善茂校長とその記録―	藤石良明	講演会記録
2012年3月	24	表紙解説		旧寒川駅舎（田口雅巳氏画）		史資料紹介
2013年3月	25	特集	明治時代の寒川神社	町史講座・明治時代の寒川神社	圭室文雄	講演会記録
2013年3月	25	特集	明治時代の寒川神社	宮大工矢内匠家資料に見る寒川神社	細井守	論考
2013年3月	25	特集	明治時代の寒川神社	資料紹介・明治期寒川神社の新聞記事	圭室文雄	史資料紹介
2013年3月	25	講演会記録		寒川町岡田遺跡とその時代	戸田哲也	講演会記録
2013年3月	25	事業報告		映像資料の公開について	高木秀彰	業務記録
2013年3月	25	表紙解説		寒川神社境内絵図（寒川神社所蔵）		史資料紹介
2014年3月	26	特集	関東大震災と寒川	特集にあたって―関東大震災とある詩人の誕生―	内海孝	趣旨文
2014年3月	26	特集	関東大震災と寒川	防災講演会「歴史に学ぶ防災論―関東大震災と神奈川―」	武村雅之	講演会記録
2014年3月	26	特集	関東大震災と寒川	資料紹介・佐藤峯太郎の残した震災記録	椿田有希子・鳥養圭美	史資料紹介
2014年3月	26	特集	関東大震災と寒川	企画展「関東大震災と寒川」	渡辺真治	展示記録
2014年3月	26	特集	関東大震災と寒川	ミニ展示「災害から記録資料を守る」	高木秀彰	展示記録
2014年3月	26	特集	関東大震災と寒川	上映会記録「関東大震災と防災対策」	高木秀彰	業務記録
2014年3月	26	事業記録		資料保存ワークショップ「水損資料等の応急措置を学ぶ」	多和田雅保	業務記録
2014年3月	26	視察レポート		寒川文書館を視察して	松野恭子	職員外レポート
2014年3月	26	表紙解説		寒川町民センター緞帳原画（部分）（当館蔵、昭和54年、（株）川島織物製作）		史資料紹介
2015年3月	27	特集	下寺尾官衙遺跡群を学ぶ	特集にあたって	小林秀満・高木秀彰	趣旨文

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
2015年3月	27	特集	下寺尾官衙遺跡群を学ぶ	下寺尾官衙遺跡群の全体を学ぶ	大村浩司	趣旨文
2015年3月	27	特集	下寺尾官衙遺跡群を学ぶ	岡田南河内遺跡及び大曲五反田遺跡の発掘調査の概要について	高橋香	講演会記録
2015年3月	27	研究ノート		旗本たちの幕末維新―中瀬村領主・春田与八郎を中心に―	椿田有希子	論考
2015年3月	27	研究ノート		大神塚古墳発掘資料にみる坪井正五郎人脈	川村伸秀	論考
2015年3月	27	座談会		教員・井上有一の素顔	金子武茂・後藤功・蓮見保仁	座談会記録
2015年3月	27	資料紹介		田端村五人組帳前書	寒川古文書愛読会	史資料紹介
2015年3月	27	展示会記録		１９６４―50年前の寒川―	鳥養圭美	展示記録
2015年3月	27	表紙解説		秋の積乱雲（「墨絵の相模川」より）（一九八六年十月、服部漁舟氏画、荻田豊氏蔵）		史資料紹介
2016年3月	28	特集	寒川と茅ヶ崎の浜降祭	特集にあたって	高木秀彰	趣旨文
2016年3月	28	特集	寒川と茅ヶ崎の浜降祭	浜降祭日記から見た祭礼の移り変わり	圭室文雄	講演会記録
2016年3月	28	特集	寒川と茅ヶ崎の浜降祭	「浜降り」神事について―相模湾沿岸を中心に―	鈴木通大	講演会記録
2016年3月	28	特集	寒川と茅ヶ崎の浜降祭	資料紹介・浜降祭の新聞記事	武藤容子・鳥養圭美	史資料紹介
2016年3月	28	特集	寒川と茅ヶ崎の浜降祭	展示記録「浜降祭　寒川の記録資料から」	高木秀彰	展示記録
2016年3月	28	講演会記録		阪神・淡路大震災20年―記憶を伝える・記録を守る―	吉原大志	講演会記録
2016年3月	28	展示会記録		記録が語る銃後―大蔵自治会文書にみる戦時下のくらし―	鳥養圭美	展示記録
2016年3月	28	展示会記録		寒川町　75年の軌跡	鳥養圭美	展示記録
2016年3月	28	表紙解説		浜降祭（観光絵はがき「湘南さむかわ」より（一九九六年発行、田口雅巳画）		史資料紹介
2018年3月	29	特集	襖に閉じ込められた地域の歴史	特集にあたって	高木秀彰	趣旨文
2018年3月	29	特集	襖に閉じ込められた地域の歴史	大切な記録が水につかったら？ ― 茨城県常総市に学ぶ―	宇野淳子	論考

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
2018年3月	29	特集	襖に閉じ込められた地域の歴史	襖に閉じ込められた歴史史料を読む	多和田雅保	論考
2018年3月	29	特集	襖に閉じ込められた地域の歴史	入澤家襖下張り文書目録	鳥養圭美	史資料紹介
2018年3月	29	特集	襖に閉じ込められた地域の歴史	史料翻刻「東京地所家屋新報」		史資料紹介
2018年3月	29	講演会記録		寒川を中心として縄文時代の貝塚を学ぶ	小林秀満	講演会記録
2018年3月	29	展示記録		田村通り大山道を歩く	鳥養圭美	展示記録
2018年3月	29	展示記録		図書館・文書館　10年のあゆみ	鳥養圭美	展示記録
2018年3月	29	表紙解説		「鎌倉江ノ嶋大山新板往来双六」より四ッ谷（葛飾北斎画、神奈川県立歴史博物館蔵）		史資料紹介
2019年3月	30	特集	マッチラベルのデジタルアーカイブ	特集にあたって―デジタルアーカイブ事業の概要―	高木秀彰	趣旨文
2019年3月	30	特集	マッチラベルのデジタルアーカイブ	たるみ燐寸博物館はいかに鍛えられたか	小野隆弘	講演会記録
2019年3月	30	特集	マッチラベルのデジタルアーカイブ	マッチラベルと地域社会―商業地勢の立体化をめぐって―	内海孝	講演会記録
2019年3月	30	特集	マッチラベルのデジタルアーカイブ	マッチ国産化政策と吉井友實―資料紹介／交詢雑誌「東京新燧社之記」―	内海孝	史資料紹介
2019年3月	30	講演会記録		茅ヶ崎と寒川の幕末維新	大口勇次郎	講演会記録
2019年3月	30	実習レポート		博物館実習に参加して	加山菜穂子	職員外レポート
2019年3月	30	表紙解説		三枝惣治氏マッチラベルコレクションより		史資料紹介
2020年3月	31	特集	広報にみる昭和と平成	特集にあたって	高木秀彰	趣旨文
2020年3月	31	特集	広報にみる昭和と平成	講演録「くらしにみる時代の変化」	加藤厚子	講演会記録
2020年3月	31	特集	広報にみる昭和と平成	展示記録「広報ちがさきにみる昭和と平成」	松隈雄大	展示記録

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
2020年3月	31	特集	広報にみる昭和と平成	展示記録「広報さむかわの70年」	鳥養圭美	展示記録
2020年3月	31	特集	広報にみる昭和と平成	資料紹介「寒川町弘報委員会関係資料」	鳥養圭美	史資料紹介
2020年3月	31	資料紹介		簇本杉浦家八阡石陣立御料地	平尾直樹	史資料紹介
2020年3月	31	展示会記録		県営住宅と岡田遺跡	高木秀彰	展示記録
2020年3月	31	表紙解説		相模川附高座郡村々麁絵図面（文政七年＝一八二四、当館蔵、皆川邦直家文書）		史資料紹介
2021年3月	32	特集	町制施行80周年	特集にあたって	高木秀彰	趣旨文
2021年3月	32	特集	町制施行80周年	『寒川町史』編さんと文書館	圭室文雄	論考
2021年3月	32	特集	町制施行80周年	公文書を残すということ	小川千代子	論考
2021年3月	32	特集	町制施行80周年	寒川町80年のあゆみ	平尾直樹	史資料紹介
2021年3月	32	特集	町制施行80周年	展示記録「寒川町の80年」	鳥養圭美	展示記録
2021年3月	32	特集	町制施行80周年	資料紹介・町制10周年のメッセージ	高木秀彰	史資料紹介
2021年3月	32	小特集	相模海軍工廠と湘南中学校	相模海軍工廠と湘南中学校生徒の視点―高松宮日記を援用して―	内海孝	論考
2021年3月	32	小特集	相模海軍工廠と湘南中学校	蒲田均さん聞き書き	聞き手　内海孝	インタビュー記録
2021年3月	32	小特集	相模海軍工廠と湘南中学校	資料紹介　塩澤榮一「回顧録」		史資料紹介
2021年3月	32	展示会記録		特別展・記録にみる流行病	高木秀彰	展示記録
2021年3月	32	表紙解説		手はいつ洗わなければならないか？『広報さむかわ』昭和三十一年五月号）		史資料紹介
2022年3月	33	特集	梶原景時とその時代	講義録「梶原景時公の生涯と歴史的役割」	鳥養直樹	講演会記録
2022年3月	33	特集	梶原景時とその時代	講演録「鎌倉本体の武士・梶原景時」	入澤一三	講演会記録
2022年3月	33	特集	梶原景時とその時代	資料紹介・一宮館の記録	高木秀彰	史資料紹介
2022年3月	33	研究ノート		宮山村の殿様―近世中後期以降の杉浦氏の系譜―	中門吉松	論考

④『寒川町史研究』記事一覧

刊行年月	号数	目次見出	特集名	タイトル	著者名	記事種別
2022年3月	33	展示記録		企画展「相模線　100年の記録」	高木秀彰	展示記録
2022年3月	33	追悼		木村勇先生の御逝去を悼む	鈴木保彦	追悼記事
2022年3月	33	業務レポート		レファレンス記録からみる寒川文書館の利用動向	富田健司	業務記録
2022年3月	33	表紙解説		石橋山合戦（部分）（歌川豊国画、萬福寺蔵）		史資料紹介
2023年3月	34	講演録		発掘調査成果からみる寒川の中世	山口正紀	講演会記録
2023年3月	34	講演録		寒川の歴史・大曲の歴史	高木秀彰	講演会記録
2023年3月	34	資料紹介		宮山村名主の御用日記	寒川古文書愛読会	史資料紹介
2023年3月	34	事業記録		企画展「梶原景時と一宮館」	高木秀彰	展示記録
2023年3月	34	事業記録		梶原景時の普及をめざして	高木秀彰	業務記録
2023年3月	34	業務レポート		寒川文書館におけるレファレンスと町職員の業務利用	富田健司	業務記録
2023年3月	34	表紙解説		鎌倉年代図絵（部分）（高井蘭山著、柳川重信画）		史資料紹介
2024年3月	35	特集	国登録有形文化財旧広田医院と広田家の人びと	旧広田医院国登録有形文化財登録への過程について	小林秀満	業務記録
2024年3月	35	特集	国登録有形文化財旧広田医院と広田家の人びと	広田孝平さん談話記－江戸時代初期から遠望して－	内海孝	インタビュー記録
2024年3月	35	特集	国登録有形文化財旧広田医院と広田家の人びと	寒川の生糸生産と広田製糸場－相州生糸と寒川をめぐって－	内海孝	論考
2024年3月	35	講演録		記録と記憶を未来へ－関東大震災の取材から－	渡辺渉	講演会記録
2024年3月	35	展示記録		企画展「関東大震災　寒川の被害と復興」	高木秀彰	展示記録
2024年3月	35	展示記録		企画展「寒川・学校給食のはじまり」	富田健司	展示記録
2024年3月	35	業務記録		寒川文書館における刊行物の収集について	富田健司	業務記録
2024年3月	35	表紙解説		大山街道（村田衣江さん蔵）		史資料紹介
2025年3月	36	講演録		戊辰戦争と地域社会－内乱期の村々－	宮間純一	講演会記録
2025年3月	36	史料紹介		豪農入澤家の江戸町屋敷関係史料－町屋敷の譲渡・相続から都市社会を読む－	岩淵令治	史資料紹介
2025年3月	36	展示記録		企画展「もっと寒川を知ろう！－『社会科資料集さむかわ』を素材に－」	高木秀彰	展示記録
2025年3月	36	表紙解説		日本橋北神田浜町絵図（部分）（国会図書館デジタルコレクションより）		史資料紹介
2026年3月	37	インタビュー		青年学校教諭の七年間－寒川の戦中・戦後の中等教育に携わって－	中嶋良・岩城清一	インタビュー記録
2026年3月	37	展示記録		企画展「学校日誌からみる戦時下の寒川」	富田健司	展示記録
2026年3月	37	業務記録		寒川町史編さん事業の資料収集について－民間資料の収集とその活用－	平尾直樹	業務記録
2026年3月	37	表紙解説		昭和15年頃の寒川小学校		史資料紹介

⑤町史編さん事業の組織

年度	西暦	町長	町史編さん事業の組織		町史編さん審議会	備考
			担当部署	所属長		
S60	1985	藤沢賢一	企画室	室長・清水進	1/20　15名を委嘱、基本構想を策定	4/1　町史編さん準備担当者を企画室に配属 8/5　事務研究会発足（計５回開催）
S61	1986		町史編さん室	室長・三澤誠		4/1　９名を町史編集委員に委嘱 4/5　第１回編集委員会を開催
S62	1987		総務部町史編さん室			
S63	1988				視察：川崎市公文書館、川崎市民ミュージアム	
H１	1989		企画部町史編さん課	課長・三澤誠	視察：埼玉県立歴史資料館、群馬県立文書館	12/11　高野山高室院文書調査を開始
H２	1990				視察：伊能忠敬記念館、千葉県立大利根博物館、八潮市立資料館	11/1　町制施行50周年を記念し、町史第１巻を刊行
H３	1991				視察：浜松市博物館、細江町立姫街道民俗資料館、新居関所史料館	
H４	1992				視察：寒河江市史編纂室、いでは文化記念館	
H５	1993				視察：江戸東京博物館、西那須野町郷土資料館、小山市立博物館	
H６	1994				視察：戸田市立郷土博物館、群馬県立歴史博物館	
H７	1995				視察：磐田市旧見付学校、沼津市明治史料館	
H８	1996				視察：入間市博物館、大間々町町誌編さん室	
H９	1997					
H10	1998					
H11	1999			課長・浜田友司	8/3「町史編さん資料の保存･活用に関する要望書」を審議会から町長へ提出	
H12	2000	山田文夫				
H13	2001					
H14	2002			課長・五藤幸夫	10/4　「文書館の業務に関する提言書」を審議会から町長へ提出	2/28　町史第16巻を発行し、本編完結 3/31　(仮称)寒川町総合図書館基本計画を策定

年度	西暦	町長	町史編さん事業の組織		文書館運営審議会	備考
			担当部署	所属長		
H15	2003	山田文夫	企画部企画課 町史編さん担当	課長・須藤武		
H16	2004					
H17	2005			課長・小島博司		2/28　寒川文書館運営方針を策定 3/24　寒川文書館条例を制定
H18	2006					
H18	2006		企画部企画課寒川文書館	館長・小島博司		11/3　寒川総合図書館・文書館が開館
H19	2007	山上貞夫	総務部総務課 寒川文書館	館長・木内礼次郎	6/29 文書館運営審議会が発足	
H20	2008			館長・小俣道雄		
H21	2009			館長・大久保邦夫		
H22	2010					
H23	2011	木村俊雄				
H24	2012			館長・小島輝雄		
H25	2013					
H26	2014			館長・新藤聡		
H27	2015			課長・新藤聡 館長・高木秀彰		
H28	2016			課長・戸村孝 館長・高木秀彰		
H29	2017					4/1　庁舎管理について指定管理者制度を導入
H30	2018			課長・三橋義明 館長・高木秀彰		
R1	2019					
R2	2020					
R3	2021			課長・伊藤正治 館長・高木秀彰		
R4	2022			館長・伊藤正治		
R5	2023					
R6	2024					
R7	2025					